



玉函結線分
白巻

ホ 2
642
2



明本如2
箱642
2



玉緒線分氏巻

一 今ハ廿年餘の希つ身、京にまうで居て、氏爾手波のこと論め
たる一書の、其題号ハ忘れつ、何まきと云るをみる事有
き、詞玉緒をハ憑じ、是らぬもの云心よを、とかく云たる者な
り、極一木の賞、ゆけとまれ、己ハもと玉緒を深く信じて、縁
返一見つ、調ひうぬる、我心のさめく、縁ハスなるをのこい、とむつ
か、う名ひ、佐ぬる、おどに、詞ハ、衝と云書を、得て、やうく、其みちを
分ゆけば、は、彼玉緒の、正き、筋ハ、形一やと、聊を、辨へらう、こ、
ちも、あて、うらう、き、詞の、林ハ、波方アツクこそと、遠く、より、な、
う、あ、思ふ、む、り、に、ハ、た、う、ま、う、ば、い、う、で、わ、が、如、惑、ひ、も、ら、ん

初山ぶこの位のみ、何の出立よをみせをやとて、活語指南に
 山口梨などこれうれ書頭かつうし、さうハ其ゆる志きたくハ
 の花咲あたりへハ自らまど得ふらずあてと下笑ふ人必有
 かんとは知たぐし、いとゆるハ衛に依てしんのみびをば、黙え
 らせのあまごよなん、それい付て文よあふ、かの玉結のいと解が
 たうりし者を今小なし、それを、いと云らん、これハ初学の位
 のたつきとならば、あまじと賞せらふし、くさ少か、ねば
 七巻よまける玉結より分て、正しき物を採正し、んと思ひ定め、
 るハ、何と云る書の類、ハ、何と云、全くるのめでたき名、
 およ玉結をば、よりに依べきよき、拙書と、花がへるよりのいと、ま

小て、遂に硯に向ふ事になりぬ、ハ天保二年極月、
 一伊勢の山田なる神司の中、足代、弘訓と云ハ世に名傳る物識
 り人、其人、ハ八衛の造主、後鈴屋翁より、即々同る事と、語りけ
 らく、古事記傳、ハ時、試、いと、或ハ強て、叙、述、と、撰、断りて、何
 とれと、曰れ、事、多し、さうハ古事記を、注、釈、と、書、小し、あれ
 ハ、其本文、小有事、ども、小、毫、ハ、かうと、未、ど、解、き、ハ、決、め、れ、ど、何、とも、云
 々、その、ミ、さん、も、さ、れ、が、なる、処、一、當、り、て、の、事、然、る、を、世、に、それ、捕、へ、て
 ハ、さも、憎、さ、げ、に、云、破、る、も、何、れ、バ、又、ハ、位、ど、一、位、を、て、故、公、持、の、説、なり、考
 へ、れ、バ、ま、ど、云、采、し、つ、を、く、執、ど、る、類、ひ、も、あ、め、り、共、小、い、と、あ、ら、き、な、記
 事、あり、とな、ん、云、ひ、う、め、か、れ、ら、な、い、とい、つ、り、是、を、同、く、に、又、か、詞、遣、友

鏡、鈴屋公羽ハ世のたふめく、一立紙て云云と云々心志らひいよけ
あうハ何らざりけらしと出る小いとも思ひまれてたうん、

一、くりわくとハまれど、坎えなりくにあげ糸の締わらうせらわざ
なるハやと化の見らせ、或ハ斯るふいをあもたどえとハ何らと終
むべきなど様多うらん、そけ又更一釈きわけ様よくいし、何ん人を期
べく、それまたん、ハまづ世ふおどこらさるハ、何事も知られざらべけ
れどと思定めつ、さうえかの強ても試にも云る小働ひてたうん

一、氏爾乎波の字びハ、秋よむにも文うく小も固より斜なるまどく、
最やごとなきわざとそ、それを教へたる書等も少うくわどいハゆ
る詞玉緒と云七巻の書の五十年餘りの昔より世ふ出たるぞ有か

中に特、ぬけて正あつづらなれば、いにも隨て、右の義ハあを筋ど
もを、曉り得べきあり、さそ其玉緒の教をバ、飽まで依じ貴むる
一付て、又惟あ、彼翁の云らん、ハ、こはいう、さそや買あるふ、そ
など、り心の附たらん、ハ、必志もこめてあるべき、こあ、い、ら、ど、も、を、
何やられやと云、試るハ、やそ其書の訓へ、一依つ、づら、くも、此、筋、を、わ
ら、る、板、に、成、した、る、其、を、び、問、え、て、ん、の、あ、ひ、に、な、ん、斯、て、筆、の、
つ、く、ハ、へ、て、ま、れ、バ、て、こ、ま、ま、の、端、め、ハ、さ、る、も、の、こ、そ、て、お、つ、て、彼、一、部、の、ま、
に、始、より、終、り、一、至、る、と、こ、こ、ハ、と、思、ふ、処、し、あ、れ、ハ、聊、な、う、詞、づ、う、ひ
な、ど、ま、も、て、も、更、一、の、こ、ま、ま、に、云、ま、ん、と、す、そ、れ、一、付、て、ま、つ、○、を、
印、あ、て、
必本のま、こ、つ、つ、あ、ま、を、は、
は、を、ま、と、板、に、さ、う、へ、ま、て、 かい、頭、を、限、ハ、詞、玉、緒、の、本、文、を、あ、ら、う

なり、次「△」をあるしそりき記せるハ己が議めの詞ども、それが中小
 て又「を」つけ」を記せる分りハ、玉結「ま」れ右への書どもにま
 又ハ右「ま」りどもをバ引出ぬるあり、あへし、又△の標しせるが
 有ハ、玉結の本又とけなきながら、本文に補くやとあへるかどふて、○
 と△との字を合せたることあるありの己が議め等たり、さて界行
 の外小贅して、九丁右二行同五行あるハ、幾十幾右左などこのこ
 ろハ、玉結の事、其外「ハ」に「ま」の何ものを幾ひらと記さん
 と思た人本「ま」たれど、何がしの書「ま」の「ま」を幾ひらと記さん
 頭「ま」ぬも「ま」らんハ、らん人後「ま」く補ひかしてよ、

一本書^玉緒「ハ」歌部文部とつけて教へあれど、今ハ其て「ま」をえて小

をえ小後いて右の文「見」えたるにておたる「ハ」あぬをもやうて二
 「云」らんとの、読人此意を得よ、^此猶^波奥^終「ま」も復断るべし、

○て小をけし、神代よりおのりく「ま」は「ま」を小をきりて、その本
 末をうちへあたまらるる「ま」を「ま」らん有て、^ま

△爰ハ、その本末のうちひあか「ま」まをらん有て」と云たらんや、
 うらん、同事ながら、此^十「ま」○て小をけは、そののへち、その本末をう

ちへあたませし、と有処など「ま」の「ま」と云ひひなへあたませしと云へ
 るが、まより空きあり、^此て^言語^四種^論「出」て、其^れが^細自然^の詞^使然^乃

詞と云事を辨へ、^まを^まる^まき^まり、
 ○このまのへを「ま」やまりて、本末りて、まがむるまのまのま

うるゆゑなり。云

△爰ハ素より期て可うべし、さうハ上の件ハ自なる定りを云へる
 なるを、此処ハそれがかれての後、字びて物するんをへなればありご
 て本文の傳よてようるべきあらば、別ニ事々お云べくもあらぬを
 やと、かへより評る人もあゝめど、こハ又人育て、上の件よかまへあ
 るまゝと有をうあひ。あふとせむやと云るをこて、然らばせいぢや
 こそ、爰らをも「このそののびをりやまりておまめ」云と云べ
 きよゆずや、と後ニ云ん人の必将有あん致と思はるゝ小たりて
 うるこられど、致致と断りてよあん、
云々そののめそののつん
 云々そののひそののふん
 と云々の整りのめ、又おのめおがむるおがめんと云と云うみおがむおがまんと云との別
 る松ハ、この五葉六葉七葉よきて又自他のういおて、云とあら処考ふべし又文章部

の録分ニ云
 人をもこよ、但し是らのいとも致あき事ども、是より次く、処々小致彼
 とられど、ぐらうハ断らで、そハ皆只かく改めばやと覚ゆる松をのこ、
 聊づ、云もんと見ん人此意を得て、

- ちごまりちるしを云
- △此処のち。文字ハ、ハハあを写し、誤もるよてハなきう、
- 後のその人々まゝ、得るよとられ云、後のその人々をさく云
- △是ハ、ぐらうその人々、又ぐらうそのその人々、など云もんぞ宜
 らん、但しこハ致書の爰よて云ハ、その序でなればあり、然て近世の
 文ニ致後の世と云るハ、身世の事を云小濫とていふよそや、覚ゆる多し、
- 岡成竹云、知らぬのく、そつふるのふらひ。

△爰ハ今一、何むと云を加へて、例成付云積知まどみくつふ

むるのぬぐひと云べき処なり即おく世世廿九丁丸いふも此海よ云

ちんきをやはむ表此中ふ身を丁そ居めと其例証を奉云へ

り、紐鏡小素より才卅七段とて圖示せれば、爰ハ全く略して云るため

れど、何む文字の載も連も例有て、爰ハ示し、並んぞ宜べき

○のの結びよそ、ちんきを小て云出せ

△げ小よくも考へたる者なる哉、但し其ののハ三卷の縁分よ云

べきと多く、そこに至て考べし、此より分よてハ爾卷十九丁あり、自下まで本

○何後九浅茅生れ小やの志の系云書玉緒の巻つけ丁づけのミ云へる例と知ま

△こへ、中よて截、る例ハ万葉二の、明日香能云何方爾所念廿六

食可云文爾之寸高照日之御子ちんきを補てもみべしもて短可

せり例なれども、てよを付の格、別ハなき故、此よりけハ長手なるハ又よのよて証

も云ハむ、をりく、文章からてよを付のキ未うけあへるをも交へ奉るなり、

○のし

△こハ、あま松の云、塩がぬの云、思ひつき小しを引てもみべしこハ伊

かのつた、一、姑く依て云、其字本の者やうも、二、卷十八丁丸の、のより分小い、抑勢未定

ふがごとく、合せ考てよ

○ふきふしてきてし

△是ハ次上の件のき志、あにち小ぬぬれ、補と活く語のに文字

又てつづるつれと活く語のてり、の連なるのになれば、あながちに断

る別よべき小ら、ず、此由ハ、性年わが著し、並し、友鏡の必し照し、又

それが底廻彩とて辨る語等を来へる書を見てよく考へたば明
に了まぬべし、と云られば爰ハハをりつ、但しロ志ロふロよロ又ロでのそ、これ
やが極よとのちあらひなりせば、それがロそのロ結ロびロとロなるロ知ロかロてロしロをロもロ其ロ必ロハロ例
のま、小見ハしロ並ロぎロしロたロりロこのロてロ近ロくロハ、和語説畧圖として一節、諸活用言をわハ
し、それ後を受る辞ロどもロ大ロくロをロもロ示ロせるロを
又て考へたを、破き竹の如くぞとられん、

九十八

○のホし

△伊勢集三、あふぬの通ひ二に一、三埴電四のホのほ二は一思ひつき三に二き一、
正保板本ハにきかれバ此ハ出をべくもわらねど、右右の方二言一り二古一本二に一よレれレバ二こ一に出レてレ宜レき一あり、
印本よレらレしレき一ハ二埴一電三の二乃一の二ハ一、
本ハ正保板の本の二と一なり、古本ハハ一古字本
よレてレ、その二卷十八卷の交の表二の一処二云一べし、
フぬの云ひ二の一の二なり一、
○邦二の一書二は一き二よ一や二ま一り二を一ホ二し一、
あ二と一ハ二き一け二ど一又二る一よう二も一あ二き一。

九十九

○何の次二こ一と二何一の二物一するも二よ一ら二ん一、
截レたるも、オ二五一ウ二を一き二れ一るも、
共二に一其二証一をレ被レとレ有レてレ、
○何二の一次二こ一と二何一の二物一するも二よ一ら二ん一、
さ二ら一ハ二ホ一ー二ウ一の二中一にて

△爰に於てハ傍なるさ二め一なり二志一む二い一ち二ん一、
心二を一し二と一有レる二こ一そ二宜一しレられ、
然レる二小一巻二を一も二あ一き二と一せる二ハ一ホ二り一
て、
奥二の一以二前一をレてレ心二を一は二不一調二と一の二系一よ二出一せる二ハ一何二も一特二々一とレる二ハ一ホ二り一
の二志一わ二ざ一に二り一てレハ二い一ぶ二か一、
後二二一卷二十六一丁二の一
り二分一云二べし一、

○何二を一ホ二し一と二一一首二の一ま二バ一をレ結二ぶ一例、
和二方一所二款一合二の一よう二り一し二た一き二ハ一六
帖三、
い二う一よ二う一てレに二も一う二測一入二に一し二う一き二に一志二ふ一せ二ぬ一、
裁二才一か二ら一ハ二ホ一り二ウ一の二中一にて
ら二と一る二ハ一ど二、
此二方一ハ二又一ち二ハ一バ二い一うよ二う一てレハ二か一の二信一語二の一何二率一よ二あ一ら二い一う
てレの二如一く二、
に二ハ一預二の一に二ハ一か二の一や二う一ホ二も一き二こ一め二り一、

○何二の一次二こ一と二何一の二物一するも二よ一ら二ん一、
さ二ら一ハ二ホ一ー二ウ一の二中一にて
截レたるも、オ二五一ウ二を一き二れ一るも、
共二に一其二証一をレ被レとレ有レてレ、
○何二の一次二こ一と二何一の二物一するも二よ一ら二ん一、
さ二ら一ハ二ホ一ー二ウ一の二中一にて

たり、其一つづ、を奉バ、万十四ナ川上の祢ぶろさぐやあやふくうのめとて

こそことに出ル後拾ナたらちねハえうあくてこそやミルハこハ

いづこととてまゝぬらん、かく此玉徳越ての例小ミカドはて一首の改りナ

とナカはうたるとをまづ一音づて出し並を此類六帖五いつの万小恋一うら

り未ホ乃おときナカ授かくじ、古奇ども考て知べし、序に云此六帖五いつの万小恋一うら

よも有をバ今思おる春暎四をを出してん、枕冊子の十四むげよこそひうん

トハにハ一ハ、曰上七の九など、是ら何きも笑ハハにハぬぬるぬれあんと

活ハらる辞たつるハぎ志ハあう小連ハらるのこハして別ハの辞ハハあんでき

て志てあうも准知すべし、然ハあれど何ハなく一の辞の極ハもげ小関

えておたられバ、さう方ハ付て此ハ固ハ小、彼ハきハせハの例をも聊示

さん但今賞えれど有んとハ思後小、後人の補ハ人を期ハづく物し並なり、

大

後

そ

の

や

何

ま

そらさよりあハ出ハれハねハんハうハもハれハぞハようハもハなハらハちハせハ

やかくハさハるハ人ハのハむハうハもハなハやハせハしハよハをハあハりハそハめハれハ神ハよハらハやハ

ゆきとせのたふやどりてこハてきハはハまハとハ蝶ハ乃ハハハまハよハぞハりハらハ

△爰かる方ハ、かくこせ丸た、たれホやどりて、と有本の方、例え易き松あり、
 堀百首かるによらば、此方ハ人てきの証、奇あり、使てきのよは、たうく
 む、是小換るよハ、二入、此し床にて、休く、契て、てきのど、うよ、亦を、打たれ、め
兼挿、是らよらん、とて、堀るよハ、件リ、の言、為す、夢よ、や有らん、とり、又二の
家集、三下しの、のち、り、大、かる、時ハ、句、花、一、遊、いて、とせ、も有、とう、や、とて、序、よ、云、四、な、れ、花、
さ去、のき、へ、掛、る、た、う、考、べし

九九

△何とのこ必まて、何と頭し、並ぬハ、爰も、飽ぬ、とあり、如し、上に、云、如
く、ふ、し、て、とて、別、小、有、に、あ、ら、ね、紐、繞、方、四、才、五、の、兩、段、ハ、百、が、う、ち、く
て、も、い、ら、ぶ、れ、ど、既、よ、是、を、物、せ、る、上、ハ、三、の、物、の、大、結、ハ、折、張、て、繼、む、其
証、方、ハ、た、く、丸、例、よ、遠、ハ、ズ、四、ハ、頭、し、並、せ、よ、か、ら、べ、う、思、は、る、上、可、其、証
奇、も、も、ぞ、に、有、と、ち、り、上、よ、出、せ、、、如、き、折、少、う、う、ぬ、事、あり、

一〇〇

△此、ぬ、此、よ、た、ぐ、へ、る、し、も、て、小、を、え、の、の、ら、本、未、意、待、べ、き、と、り、
 今書六巻一にハ、○不のいまご、松、を、か、め、て、い、ふ、こ、き、ハ、お、い、ふ、ま、
を、毛、皮、の、弦、び、ま、り、上、う、ぞ、の、や、何、と、お、ま、て、ハ、お、む、ま、ふ、て、ね、し、と、有
り、げ、小、松、と、先、ハ、覚、ぬ、れ、ど、折、考、る、小、此、お、ハ、か、く、ぞ、あ、ら、ん、の、約、り、分
ら、ん、と、思、な、り、活、雜、三、編、小、珠、論、一、条、有、友、鏡、に、も、異、四、も、連、用、截、断、連、射、の、二、を、兼
た、る、板、よ、必、せ、る、ハ、此、放、た、り、但、伴、の、必、ハ、猶、底、延、影、を、入、て、明、よ、ハ、知、べ、し
さ、て、爰、よ、ハ、唯、甚、討、し、付、て、て、小、を、け、の、本、末、の、掛、る、松、を、示、ん、と、ま、ら、に
た、も、使、の、末、を、お、と、せ、ら、を、思、出、る、伴、よ、玉、結、の、例、よ、使、せ、て、一、首、の、終、と
半、ば、の、を、各、一、そ、づ、示、ま、と、次、々、れ、必、の、如、し、其、外、ハ、覚、え、れ、バ、え、頭
ふ、れ、ど、ち、よ、云、ら、如、く、連、射、云、を、も、兼、た、り、覚、え、な、れ、バ、ぞ、の、や、何

下りかゝるも若かりかん、猶よく考ふべきあり、活語指南も合せ考べし、

立^立前^前り^りス^スて^てを^を返^返ら^らみ^みち^ち際^際ハ^ハぬ^ぬと^とあ^あら^らも^も水^水え^えま^まさ^さら^らト^ト

と^と又^又よ^より^りれ^れ又^又う^うつ^つト^ト瀑^瀑み^みつ^つよ^よべ^べと^とき^きく^くん^んと^とけ^けい^いこ^こへ^へト^ト

君^君が^が名^名も^も我^我も^もた^たて^てじ^じは^はの^の玉^玉の^のう^うら^らも^もの^のあ^あら^らひ^ひな^なき^きト^トい^いま^まト^ト

君^君こ^こも^もバ^バ祢^祢や^やト^トい^いト^トこ^こ紫^紫こ^こう^うり^り、^{日十}結^結ひ^ひ可^可も^もえ^えれ^れと^とも

未^未牛^牛の^のう^うら^らも^も藤^藤上^上位^位虫^虫れ^れと^とい^いく^くも^もを^をし^しを^をた^たら^らめ^めを^をハ^ハう^うら^らみ^みト^ト

た^たい^いな^なく^くト^トい^いか^かり^りた^たく^く水^水鷲^鷲ら^らち^ちら^らバ^バい^いら^らく^くや^やし^しか^から^らほ^ほト^ト

か^かつ^つて^てそ^その^のや^や何^何の^の類^類よ^より^りト^トと^と掛^掛ね^ねる^るた^たく^くバ^バ志^志ハ^ハ唯^唯截^截断^断小^小限^限る^るト^ト

と^とあ^あふ^ふ人^人も^もう^うら^らめ^めど^ど然^然一^一ハ^ハら^らし^し何^何と^とか^かり^りて^てト^トと^と結^結べ^べる^る歟^歟と

同^同あ^ある^るも^もう^うら^らこ^こも^も六^六巻^巻ト^ト云^云、

○^アア^ア右^右カ^カ中^中道^道老^老才^才七^七段

△此^此ア^ア右^右カ^カの^の詞^詞ハ^ハ有^有ア^ア右^右の^の一^一つ^つ小^小て^て受^受友^友一^一ハ^ハ例^例さ^さぬ^ぬ欲^欲き^きト^トあ^あり^り、^{ホレ}その^{その}故^故ハ

有^有ア^ア右^右と^と居^居ア^ア右^右と^とハ^ハげ^げ小^小同^同扱^扱、^{或る取らぬとハ取りてマ}た^たれ^れど^ど友^友一^一聊^聊差^差あ

る^るハ^ハ、^{こそ截るく詞かを考べし、}居^居ア^ア右^右ハ^ハ素^素居^居有^有ト^トて^て次^次々^々た^たら^らる^るセ^セア^ア右^右の^の為^為有^有、^ハ天^天ア^ア右^右の^の而^而有^有た^たど

の^の類^類ト^トい^いゆ^ゆる^るハ^ハ、^{それバも又をれマヤウ一ハ云ハぬ歟}悉^悉ス^スラ^ラ、^{悉スラ、越活語雑話二編一云ヘラガカシ、}セ^セア^ア右^右ト^トい^いふ^ふを^を一^一つ^つ、

出^出せ^せる^る小^小例^例セ^セバ^バ、^{悉スラ、越活語雑話二編一云ヘラガカシ、}を^をセ^セア^ア右^右ト^トい^いふ^ふ例^例を^を出^出し^して^てよ^よら^らん^ん、^{但し組織才ハ段}但^但し^し組^組統^統才^才ハ^ハ段

セ^セア^ア右^右ト^トい^いふ^ふ才^才十^十二^二段^段の^のセ^セア^ア右^右ト^トい^いふ^ふ所^所ト^トい^いふ^ふ云^云ハ^ハん^んも^も悪^悪く^くト^トい^いふ^ふ、^{畧四}畧^畧四^四、^{可考、}可^可考^考、^うう

にか^{にか}く^く小^小本^本ハ^ハ有^有ア^ア右^右の^の一^一つ^つ也^也、^{羅行四段一用らきならり、}羅^羅行^行四^四段^段一^一用^用ら^らき^きな^なら^らり^り、^{を截断テ連断テせらる}を^を截^截断^断テ^テ連^連断^断テ^テせ^せら^らる^る

一^一種^種別^別な^なら^らる^る活^活き^き板^板の^の詞^詞ト^トい^いふ^ふ有^有、^{べての成る取らぬとト異りてマを連用テ截断テ}一^一種^種別^別な^なら^らる^る活^活き^き板^板の^の詞^詞ト^トい^いふ^ふ有^有、^れれ

○^アア^ア右^右カ^カ中^中道^道老^老才^才九^九段

の^{ナカ}半^ノの例小、^{ナカ}躬恒素の、衣子ぞりさハぬれたを引る、うべ^ハハ
 有き^ゴ、^{ナカ}秋一字^{ナカ}、衣子のとわり、さてハの^{ナカ}の^{ナカ}路^{ナカ}び一首^{ナカ}の^{ナカ}半^ノ
 てたと止めたる例となりて、この証ハ、な^ハか^ハら^ハず、故小爰^ハは、^{ナカ}採定
 う^{ナカ}なるに、後、^{ナカ}堀川^{ナカ}後百^{ナカ}小、^{ナカ}髪破^{ナカ}いづもの杜^{ナカ}、み^{ナカ}て^{ナカ}ま^{ナカ}を^{ナカ}た^{ナカ}て^{ナカ}孫^{ナカ}ぎぞか
 けた、^{ナカ}細糸^{ナカ}あ^{ナカ}ら^{ナカ}く^{ナカ}を^{ナカ}を、^{ナカ}是^{ナカ}ら^{ナカ}や^{ナカ}ま^{ナカ}ち^{ナカ}ま^{ナカ}き^{ナカ}例^{ナカ}と^{ナカ}証^{ナカ}も^{ナカ}と^{ナカ}ぎ^{ナカ}、さてやの^{ナカ}結
 び^{ナカ}の^{ナカ}半^ノを^{ナカ}補^{ナカ}ふ、^{ナカ}小町集^{ナカ}、^{ナカ}志^{ナカ}ど^{ナカ}け^{ナカ}ち^{ナカ}き^{ナカ}孫^{ナカ}ら^{ナカ}れ^{ナカ}髮^{ナカ}を^{ナカ}み^{ナカ}せ^{ナカ}と^{ナカ}や^{ナカ}ハ
 う^{ナカ}くれた、^{ナカ}り^{ナカ}の^{ナカ}船^{ナカ}息^{ナカ}、又^{ナカ}何^{ナカ}の^{ナカ}結^{ナカ}の^{ナカ}半^ノは、さてたと^{ナカ}と^{ナカ}截^{ナカ}と^{ナカ}た^{ナカ}ち^{ナカ}ハ、^{ナカ}万
 三^{ナカ}、^{ナカ}草枕^{ナカ}た^{ナカ}び^{ナカ}の^{ナカ}や^{ナカ}と^{ナカ}と^{ナカ}誰^{ナカ}り^{ナカ}妻^{ナカ}、^{ナカ}國志^{ナカ}有^{ナカ}、^{ナカ}家待^{ナカ}莫^{ナカ}國^{ナカ}、^{ナカ}この^{ナカ}莫^{ナカ}ハ^{ナカ}真^{ナカ}の^{ナカ}誤
^{ナカ}り^{ナカ}と^{ナカ}い^{ナカ}へ^{ナカ}ま^{ナカ}す
^{ナカ}の^{ナカ}志^{ナカ}と^{ナカ}系、^{ナカ}その^{ナカ}の^{ナカ}例
 採考ふ、し、

元廿三 右廿五

〇何 玄法集をよむのむべーやハ云
 △此同例ながら、^{ナカ}か^{ナカ}を^{ナカ}云^{ナカ}ふ^{ナカ}は、^{ナカ}其^{ナカ}の^{ナカ}何^{ナカ}なるかうへ、^{ナカ}後^{ナカ}採^{ナカ}ハ^{ナカ}た^{ナカ}今^{ナカ}は^{ナカ}孫^{ナカ}ぎ
 て例をなめん、^{ナカ}其^{ナカ}十三^{ナカ}巻^{ナカ}なる、^{ナカ}お^{ナカ}ひ^{ナカ}て^{ナカ}お^{ナカ}く^{ナカ}約^{ナカ}の^{ナカ}長^{ナカ}を^{ナカ}る^{ナカ}も^{ナカ}を^{ナカ}だ^{ナカ}に
 〔なと〕と^{ナカ}や^{ナカ}と^{ナカ}に^{ナカ}返^{ナカ}さ^{ナカ}ら^{ナカ}を^{ナカ}、^{ナカ}是^{ナカ}ら^{ナカ}を^{ナカ}引^{ナカ}く^{ナカ}ん^{ナカ}や^{ナカ}よ^{ナカ}ら^{ナカ}し^{ナカ}か^{ナカ}ら^{ナカ}ん、
 〇^{ナカ}た^{ナカ}め^{ナカ}て
 △爰^{ナカ}引^{ナカ}る^{ナカ}後^{ナカ}十八^{ナカ}の^{ナカ}ハ、^{ナカ}伊勢^{ナカ}集、^{ナカ}い^{ナカ}せ^{ナカ}返^{ナカ}る^{ナカ}川^{ナカ}ハ^{ナカ}袖^{ナカ}より^{ナカ}流^{ナカ}る^{ナカ}を^{ナカ}と^{ナカ}い^{ナカ}ふ^{ナカ}よ^{ナカ}と^{ナカ}
 ち^{ナカ}れ^{ナカ}ぬ^{ナカ}や^{ナカ}ら^{ナカ}ぬ^{ナカ}ぬ^{ナカ}、^{ナカ}又^{ナカ}十五^{ナカ}の^{ナカ}ハ、^{ナカ}海^{ナカ}と^{ナカ}の^{ナカ}ミ、^{ナカ}家^{ナカ}居^{ナカ}の^{ナカ}か^{ナカ}ら^{ナカ}た^{ナカ}を^{ナカ}か^{ナカ}ら^{ナカ}ぬ^{ナカ}を^{ナカ}
 ち^{ナカ}ら^{ナカ}ぬ^{ナカ}あ^{ナカ}ら^{ナカ}ぬ^{ナカ}教^{ナカ}の^{ナカ}を^{ナカ}わ^{ナカ}れ^{ナカ}ば、^{ナカ}右^{ナカ}と^{ナカ}い^{ナカ}ける^{ナカ}は^{ナカ}古^{ナカ}字^{ナカ}か
 し^{ナカ}を^{ナカ}よ^{ナカ}書^{ナカ}る^{ナカ}ハ^{ナカ}正^{ナカ}保^{ナカ}印^{ナカ}本
 と^{ナカ}え^{ナカ}て^{ナカ}め^{ナカ}て^{ナカ}の^{ナカ}証^{ナカ}小
 ち^{ナカ}二^{ナカ}首^{ナカ}た^{ナカ}り^{ナカ}給^{ナカ}き^{ナカ}方^{ナカ}も^{ナカ}わ^{ナカ}れ^{ナカ}ば、^{ナカ}其^{ナカ}よ^{ナカ}う^{ナカ}ハ、^{ナカ}拾^{ナカ}送^{ナカ}九^{ナカ}た^{ナカ}ら、^{ナカ}名^{ナカ}よ^{ナカ}れ^{ナカ}い^{ナカ}ハ
 と^{ナカ}思^{ナカ}く^{ナカ}も^{ナカ}ス^{ナカ}べ^{ナカ}ら^{ナカ}し^{ナカ}川^{ナカ}さ^{ナカ}ぬ^{ナカ}ら^{ナカ}よ^{ナカ}返^{ナカ}る^{ナカ}人^{ナカ}〔た^{ナカ}め^{ナカ}て〕^{ナカ}是^{ナカ}ら^{ナカ}や^{ナカ}よ^{ナカ}け^{ナカ}ん、

九

○何や
め

同

○こそ
め

△兼捕系「是川の乃翁印本」ハ落句ハ「花をばらめ」といれど、
一本「是川の心のかげをしふみのちをばらめ」こそ「若の死をみる」め
と有ハ友の引証と成べし、但し「ハを」の字語ならん、

○「ル」より「め」近五つを証可少き故「小拾ひ系」て雑へ出せるを
諾たる哉、同じ四段の用き乍ら、羅行キ四者ま「よりらりるれ」と活
らるハげ小夥し、されハ是の「ハ即廿五丁老」別「よ」て、
さそ其けてへめ

廿五

よりらりるれと活く詞のうへこそ、いとゆるきうづくこそ、その結

ひの三轉証哥を、さるたはひ聊乍ら爰小補ひてんと云、
凡そこの「ル」ハ

志あり「て」ハちあり「へ」ハむあり「め」ハみあり又「ま」ハ
きあり「せ」ハ

てあり「う」ハ何も本語「離れぬ」趣き具「う」ハ活語指南の如、
其中「小」ハ「や」ハ「う」と云

へるも通へる「有」趣き「口」筆「み」えたる如くなれば、爰も思出るに但
せて、そ「や」の下「う」さまなる「る」の結びこそ、いとゆるけてへめ、まよ

りらるるも、と活く詞等の其何「る」となれるを聊まづ出さん古く

てハ先「せ」ら「れ」
「ら」れ「る」
万十二「う」づ「う」
「あ」妹「う」末「こ」せ「る」
「や」め「こ」かも「れ」
「の」

惑へる「恋」の志々き「小」の類、同集に採少う、
血風系に「山里」は「其」の「ほ」

へる「さ」そ「ら」う「く」こ「え」たるハ「住」処「惑」へる「常」と「る」ハ「新」玄「学」へ「つ」る「な」る「れ」と「ら」る「ハ」こ「れ」
を「信」「う」「き」「心」へ「る」
「さ」そ「ら」う「く」
「た」こ「へ」き「致」然る「と」き「ハ」若「う」引「る」万「の」引「れ」
「と」「書」へ「る」
「と」同
例と云ふ
「さ」て「け」
「せ」て「へ」め「を」ら「り」る「れ」と「せ」る「字」を「採」出「さ」げ
「ハ」き「こ」や

や	の	そ	後	も	た
<small>英之集</small> 秋きりハたちうくせもほひきの山の小きくぬ上塵 <small>けを</small> <small>六帖</small> 山のをのうつたえそなるれども多 <small>た</small> のこせ <small>せ</small> きく人のこめ <small>万四九</small> 妻ををまるといしむし有ぬれ美木のうめ <small>も</small> いまこ念 <small>めを</small> <small>六帖二</small> 昔背子、きほせりけらし我病の事 <small>も</small> 靡 <small>け</small> てつゆもおちりり <small>万十一</small> 妹がためいのちのこせ <small>せ</small> かりこものあひみされて死ぬへき抱を <small>同七九</small> ゆく川のをきゆく人の手をくねハ裏解 <small>立</small> みわの松 <small>つ</small> け <small>万六十七</small> 沖つ浪へたさあつけいさうはとる江の浦 <small>一</small> 取 <small>ぞ</small> 動流 <small>動流</small> <small>万八十九</small> くら松猿のたきかとおもほして針 <small>ぞ</small> たぬへるぬらんりの母 <small>お</small> <small>小大若集</small> 風あけた浪やたさわくかき竹乃なううらうら <small>の</small> うよ <small>つ</small> る <small>英之集</small> なくあもの <small>や</small> けり <small>き</small> くの花うつろふいろのたのがあくなる	<small>此式抄集</small> こく小かくむの故むくくむ雷小塔のまゆ小り <small>や</small> きう <small>つ</small> る <small>六帖三</small> いせの海小舟へて住しあまなれハいづれの藤うハかつきのこせ <small>る</small> <small>後抄冬</small> んあてり又たこそうあちる雪もいづれ <small>か</small> 花乃ちる <small>よ</small> まう <small>つ</small> る <small>美盛</small> さきくくこをいしあうあひこを何 <small>こ</small> さく <small>に</small> う <small>ま</small> る <small>ハ</small> き <small>ぬ</small> せ <small>る</small> <small>焼千雅中</small> 雪を秋の山の嵐の <small>き</small> あ <small>小</small> い <small>ぞ</small> あ <small>め</small> る <small>有</small> の <small>月</small> <small>秀能入道如願故亦此卷ハ所謂八代集作者</small> <small>あり新古今抄で出ると比那能歌語</small>				

や	何	こ	そ
<small>此式抄集</small> こく小かくむの故むくくむ雷小塔のまゆ小り <small>や</small> きう <small>つ</small> る <small>六帖三</small> いせの海小舟へて住しあまなれハいづれの藤うハかつきのこせ <small>る</small> <small>後抄冬</small> んあてり又たこそうあちる雪もいづれ <small>か</small> 花乃ちる <small>よ</small> まう <small>つ</small> る <small>美盛</small> さきくくこをいしあうあひこを何 <small>こ</small> さく <small>に</small> う <small>ま</small> る <small>ハ</small> き <small>ぬ</small> せ <small>る</small> <small>焼千雅中</small> 雪を秋の山の嵐の <small>き</small> あ <small>小</small> い <small>ぞ</small> あ <small>め</small> る <small>有</small> の <small>月</small> <small>秀能入道如願故亦此卷ハ所謂八代集作者</small> <small>あり新古今抄で出ると比那能歌語</small>	<small>此式抄集</small> こく小かくむの故むくくむ雷小塔のまゆ小り <small>や</small> きう <small>つ</small> る <small>六帖三</small> いせの海小舟へて住しあまなれハいづれの藤うハかつきのこせ <small>る</small> <small>後抄冬</small> んあてり又たこそうあちる雪もいづれ <small>か</small> 花乃ちる <small>よ</small> まう <small>つ</small> る <small>美盛</small> さきくくこをいしあうあひこを何 <small>こ</small> さく <small>に</small> う <small>ま</small> る <small>ハ</small> き <small>ぬ</small> せ <small>る</small> <small>焼千雅中</small> 雪を秋の山の嵐の <small>き</small> あ <small>小</small> い <small>ぞ</small> あ <small>め</small> る <small>有</small> の <small>月</small> <small>秀能入道如願故亦此卷ハ所謂八代集作者</small> <small>あり新古今抄で出ると比那能歌語</small>	<small>此式抄集</small> こく小かくむの故むくくむ雷小塔のまゆ小り <small>や</small> きう <small>つ</small> る <small>六帖三</small> いせの海小舟へて住しあまなれハいづれの藤うハかつきのこせ <small>る</small> <small>後抄冬</small> んあてり又たこそうあちる雪もいづれ <small>か</small> 花乃ちる <small>よ</small> まう <small>つ</small> る <small>美盛</small> さきくくこをいしあうあひこを何 <small>こ</small> さく <small>に</small> う <small>ま</small> る <small>ハ</small> き <small>ぬ</small> せ <small>る</small> <small>焼千雅中</small> 雪を秋の山の嵐の <small>き</small> あ <small>小</small> い <small>ぞ</small> あ <small>め</small> る <small>有</small> の <small>月</small> <small>秀能入道如願故亦此卷ハ所謂八代集作者</small> <small>あり新古今抄で出ると比那能歌語</small>	<small>此式抄集</small> こく小かくむの故むくくむ雷小塔のまゆ小り <small>や</small> きう <small>つ</small> る <small>六帖三</small> いせの海小舟へて住しあまなれハいづれの藤うハかつきのこせ <small>る</small> <small>後抄冬</small> んあてり又たこそうあちる雪もいづれ <small>か</small> 花乃ちる <small>よ</small> まう <small>つ</small> る <small>美盛</small> さきくくこをいしあうあひこを何 <small>こ</small> さく <small>に</small> う <small>ま</small> る <small>ハ</small> き <small>ぬ</small> せ <small>る</small> <small>焼千雅中</small> 雪を秋の山の嵐の <small>き</small> あ <small>小</small> い <small>ぞ</small> あ <small>め</small> る <small>有</small> の <small>月</small> <small>秀能入道如願故亦此卷ハ所謂八代集作者</small> <small>あり新古今抄で出ると比那能歌語</small>

①爰小引る万八五のなれ未ハ、如此曾毛美照カクゾモミテルと仙覚本にえたるきく
 をとりて証せるなり、是小付てハ長久義論有、活雑の条小云り、さを此
 ②有の哥のなバよを載しる証例ハ、堀川後百首なる、谷原こそら

の狭井田イいありして稀一ぞ一ま一てる一 稗田のい一など狩一る一べし

○何千六あ一ま一の玉一藻一の一末一は一云一

△万四四いつ一この一い一ぞ一つ一み一く一ま一る一と一有一も一爰一の一例一なる一べし一ぞ一の一結一

△ハ一ら一ら一じ一い一長一波一奇一小一わ一が一よ一た一ま一ぞ一つ一ね一なら一む一と一云一ひ一新一古一な一

る一方一小一誰一ぞ一い一み一の一核一系一も一あ一く一な一く一い一ん一の一枝一の一我一を一さ一ら一ぬ一と一有一ま一

ど一何一も一し一ら一と一有一べ一く一思一え一ら一く一処一た一る一を一ぞ一と一云一り一さ一る一中一小一万一四一の一ハ一

彼一千一五一あ一る一た一ま一う一ま一る一ま一る一に一比一る一本一末一の一結一と一ぞ一思一は一ら一く一 四卷四二のより
こけ又合べし

○ぞ一秋一き一ぬ一と一云一風一の一音一に一ぞ一お一ど一ろ一つ一ま一ぬ一る一

△爰一小一必一あ一も一云一べき一と一ハ一な一け一れ一ど一ぞ一ぬ一る一に一付一て一出一る一故一序一に一云一

ん一紫一式一部一系一小一あ一ら一う一ら一う一き一ま一の一乃一と一あ一ふ一に一も一有一を一や一る一方一の一ま一き一ぞ一他一

ぬ一る一と一云一る一身一も一也一こ一ハ一無一き一小一泣一き一を一掛一る一方一より一傳一ぬ一ら一と一云一へ一

た一ら一め一り一「一ま一き一」一の一ま一た一り一せ一バ一傳一ま一き一と一云一へ一き一語一格一あり一

△いつ一う一秋一風一い一く一く一た一が一あ一ら一ざ一り一の一袖一に一た一ま一し一と一云一ま一ら一う一ら一有一

秋一う一り一「一ま一時一ハ一云一と一云一」一の一論一有一後一 二卷十三のより分
線分ハ秋風の二六下 小一云一べ一し一

○ぬ一る一つ一る一

△ぬ一る一ハ一な一ら一ぬ一る一ぬ一も一ね一と一活一く一辞一と一諸一の一詞一ども一其一自一然一なる一

を一交一け一つ一る一ハ一て一て一つ一つ一る一つ一れ一て一よ一と一活一く一語一と一諸一の一詞一を一其一使一然一

なる一を一交一る一が一先一ハ一大一方一の一格一活一指一後一笔一に一云一る一如一た一れ一た一然一ひ一さ一ら一る一小一

定一ま一る一と一ハ一必一思一ふ一ま一ど一き一ま一り一即一爰一に一引一る一く一ら一じ一つ一ら一り一つ一る一な一

ど一の一く一ら一じ一を一る一を一自一然一の一方一を一用一ふ一時一ハ一目一を一さ一す一て一ぬ一古一を一し一ぬ一也一

もおろるあうちホと云る如きたん多うれど又いれおちキと云
 て落キてきキといへらぬ一八たぐもぞキつる居の涙やおちつらん
 と詠る如きも少うべ状落キきハ我事落つらんハ仇の唇の上を
 云るかろをかうのこ手と云ハ去来ぬと秋と来ぬなどとはのこ
 一ハ云て我キと一ハ梅の花又よこそ来つれと云るか如きハ又うら
 うへたりされば一向キは云をれぬとぞかしキ
 たぐもホおちキてきキと云べきに似れどは定まらぬあり来を
 20ぬもつと受たるも彼我定れどたきたぐひもれやし

○活来得寝

△是ハ為と来とハ別小一の活用らる語なれど得ハ只阿行キとそうえと
 活きキハくキくキくキと紐鏡才廿四段小せる其上へキくキくキと

あて出しつべきたり、寝ハ系行キとせぬねと活てハ紐鏡キとハ才廿
 七段と有中キとせぬぬると云詞を出せる系にのれぬべくキハ才八段
 小入キべきありキ和語説畧図を
 例と奉人系キハキと云ふ云キ死キと云詞などを出したるがや宜うらん
 されど其もよく考まば、そ活きハ彼紐鏡才十九段小ぬぬるぬれと
 出せるとのりキ活なれば其心えて抱まべきたり、是らの趣畧図
 をスそ知べし、そいぬと云詞を其活板キ一つ別たると詞ハ衝に明なる
 図らる如たれば、その詞キと一首のたうをあて載せる例を出さば
 万九キ、たつらる手にそり拵て朝うりに君キえキいぬキたなキのゆふ
 兼捕集、今キいぬキあキの松の生ぬらん年月ふともまらさけあふじ

三月又つて云云つらん^とや^{まる}たご^た多^り何^の結^びたるハ後^并
小^揚花^云云^をど^うち^あげ^きの^茂りの^みも^伊勢^集ハ^三葉^花木^ひ事^し
柳^手衣^云云^をう^ろう^ろつ^夢の^きも^此類^も少^くと^んん

右^三

△^右く^中か^中き^右の上^へう^右う^中う^右色^右と^物草^布し^さる^ハ其^証

哥^ハ悉^く有^り不^せず^テ此^才廿^四段^云云^と云^る下^り卅^二段^うう^う色^色
と云^る此^ハ何^もも^ハ猶^小い^えゆ^る下^二段^活諸^等なる^を但^し中^二段^の活^云
へ^出せ^れど^そは^出し^かふ^下二^段活^ハ阿^行より^和行^迄十^行皆^りれ^をる^り
べき^く上^云る^う如^し下^二段^活ハ^阿行^{より}和^行迄^十行^皆り^れを^るり

され^バ卅^二段^と云^るう^うう^うれ^ハ及^と活^くを^植及^飢其^かた^もぞ^の
や^こそ^ちい^と掛^りて^結べ^るが^ハ未^どと^んん^とて^式段^活多^く又^りて^段
と^卅五^丁い^つれ^ど理^りハ^ろう^と故^既小^卅二^段と^云る^一段^の図^をあ^へハ

あ^て有^りた^つる^をや^られ^バ甚^えと^活く^方の^うう^う色^をも^証
奇^いま^ごみ^ぎた^その^必ハ^まづ^何と^も可^たら^ん歟

何^の徒^も大

何^の

願^素

い^ふく^く花^をば^つま^ど花^れ香^をそ^ぞう^つみ^りる^派も^こそ^うれ

貫之集うもつみもこそうれしと云はれどもハ後撰十に云れ
 とあつらんハ爰ハ順集を引り人但順集も一巻ハ歌三月をまつ
 みの所板本ハ三月まつと有、そハさうしとなあまきど、歌いふして花をつま
 まし、さの香を袖とあふる罪もこそほしと有ハ却ていふこそやええて
 此句ハ正保板の方趣てよく同ゆる換われバそれ依りて今も引るなり
 〇をみるべしうしとえつそゆきまぐり男心ふしたてまつとあへど
 玉垣のみ川の湊はまあるまばけりうし人ののなげまむむ
 心えたりあむやとぐり松風のもくうさきけバ朝のまも
 △城ハくくくと活くハくとたれどくハくと活くとく
 とハ云まきどたむくハくむけとハ云ハるれどくむきとハ云まきねバこの

三十一

三轉の証に交へ出せらつ小いくハくねど、狩女へまべきあり、紐鏡ゆる
 かうへに友鏡を著ハせらハ毛らのあかりささてたむくくとくけと活く
 語のぞと掛りてくと止まると出さんとたハ千載集二より
 ともたのくとくゆくたき我所をの津と思へはくをらぞくよりん
 やと懸かもらも中こそ截くる方の引証千五のハ爰ハ削るべし、
 〇綾の証奇とく引る万葉の我君よりけハくよりしくやく
 の次へ並べて万四く悪くりぞ人ハまゐるくみくせ川くもくやくれくやく
 月小日くけくをくをく出さバ例具くりてくよりん、
 〇徒の証せ小く万七八春日在三笠の山く月の舟出く遊士のの
 〇益くけくよりん、

三十

三十

一首の改めたる例とはハこそ
の例とそなるなり

三十一

○老^レなるよハ^レひも^レあ^レるもの^レぶ^レく^レり^レ業^レ結^レあ^レる^レぞ^レく^レハ^レそ^レち^レづ^レ
き^レなる^レの^レ川^レと^レぞ^レつ^レひ^レ小^レ流^レき^レい^レづ^レい^レと^レぞ^レお^レち^レよ^レ人の^レま^レこ^レこ^レハ^レ
△是もそ^レち^レづ^レハ^レそ^レち^レづ^レと^レ云^レて^レそ^レち^レづ^レと^レ云^レつ^レぐ^レハ^レい^レで^レと^レ云^レて^レ
い^レぢ^レと^レハ^レい^レた^レぬ^レ詞^レな^レれ^レバ^レ同^レく^レハ^レま^レづ^レへ^レぬ^レぞ^レよ^レう^レる^レぎ^レ、

同

○の

△次^レなる^レ何^レの^レ処^レ小^レ出^レせる^レみ^レら^レぬ^レ世^レは^レ『の^レ家^レ六^レ帖^レ五^レハ^レい^レく^レち^レあ^レひ^レ
我^レを^レぞ^レ君^レ』と^レ有^レを^レ同^レ三^レも^レ出^レせる^レれ^レバ^レい^レく^レち^レも^レ我^レを^レぞ^レ人^レの^レお^レ
り^レひ^レ滿^レつ^レと^レ有^レを^レ同^レ三^レの^レ例^レう^レさ^レて^レ又^レ是^レより^レ優^レあ^レハ^レい^レく^レち^レさ^レ
ひ^レと^レ方^レ五^レ句^レの^レ有^レ方^レの^レ依^レらん^レと^レも^レづ^レづ^レつ^レハ^レ君^レの^レ結^レと^レも^レ有^レべき^レう^レ

同

○あ^レそ^レお^レり^レに^レて^レバ^レお^レこ^レそ^レち^レづ^レき^レ云^レ云^レ

△是もい^レた^レある^レ中^レ二^レ段^レの^レ結^レ云^レ故^レ爰^レハ^レ良^レハ^レい^レく^レぞ^レ六^レ帖^レ三^レま^レく^レれ^レバ^レ荒^レ
ら^レん^レと^レ思^レふ^レん^レぞ^レ世^レへ^レの^レ業^レと^レい^レま^レ出^レづ^レき^レ是^レら^レ宜^レう^レらん^レ、^此い^レづ^レき^レ
と^レ云^レる^レよ^レそ^レハ^レ、^組境^レ方^レ廿^レ二^レ段^レの^レ証^レ奇^レな^レれ^レど^レ世^レハ^レ出^レで^レ出^レづ^レと^レ結^レく^レい^レづ^レ
れ^レら^レん^レ、^但し^レ後^レ接^レし^レ世^レ方^レの^レ末^レ三^レ句^レと^レい^レれ^レど^レ今^レハ^レ六^レ帖^レに^レ依^レて^レこ^レの^レ
証^レ奇^レと^レハ^レ引^レか^レり、

同

○た^レ考^レ子^レ子^レた^レま^レま^レむ^レあ^レが^レま^レて^レい^レぬ^レう^レひ^レの^レえ^レぬ^レら^レハ^レま^レり^レを^レあ^レり^レな^レや

同

○ぞ^レう^レや^レ考^レ子^レ考^レも^レき^レて^レい^レぬ^レふ^レや^レと^レ志^レが^レを^レか^レて^レり^レか^レぞ^レう^レづ^レづ^レぬ^レら^レ

△是も^レぬ^レハ^レぬ^レわ^レん^レぬ^レひ^レて^レな^レど^レ云^レべ^レく^レ尋^レに^レと^レハ^レ云^レま^レす^レい^レぬ^レと^レ
い^レに^レて^レい^レま^レす^レん^レぞ^レと^レハ^レ云^レれ^レど^レ又^レい^レま^レん^レと^レハ^レ云^レる^レれ^レど^レい^レぬ^レと^レ
ハ^レ云^レま^レれ^レぬ^レ等^レの^レけ^レぢ^レめ^レ有^レさ^レす^レい^レぬ^レハ^レ希^レ求^レ 世^レ云^レ 下^レ知 ^よハ^レい^レぬ^レと^レ云^レて^レい^レぬ^レよ^レと^レ

ハ云ふべし。尋ねハ尋ねよと云て尋ね。とのいふれぬ詞あり又不往と
 いふ。どとハ云ふていふ。と云例不尋ハ尋ね。どとの云例なり。玉緒
 と内作の活用抄小段と既小明なれば是をかくして小てハ又よたう。世の
 かるそり人と同きわがたう。のハ意よりあるけき。ど今より考れ
 を。探是ハマきて示一つべきとよぞ。皆らふ。されバ此処ニ。こゝえとる引
 証の中に尋ねと云詞ハだの。よ。出まぶ。いぬと云詞の。ゆる。も。け。子
 も。の。云ハ実ハ。お。も。境。才。十九。段。の。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。の。処。小。出。す。べき。た。う。さ
 れ。ど。彼。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ハ。其次。上。才。十八。段。の。つ。つ。つ。つ。と。双。べて。共。て。小。を
 は。の。ぬ。つ。つ。と。あ。て。さ。さ。す。べき。換。に。自。ら。思。ま。れ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。バ。此。い。ぬ。ぬ。を。彼
 來。た。な。ど。の。如。く。別。小。一。段。を。別。ち。て。再。し。重。ん。も。悪。う。と。じ。か。よ。う。く。り

い。ん。い。い。ぬ。い。ぬ。い。ぬ。と。云。々。と。あ。ぬ。あ。ぬ。あ。ぬ。と。の。み
 云。て。あ。あ。と。も。あ。だ。た。絶。て。云。と。れ。ぬ。詞。と。を。同。に。例。に。せ。る。ハ。精。し。か。げ
 然。ハ。何。れ。ど。玉。緒。と。云。書。ハ。本。三。轉。の。証。奇。と。て。物。せ。る。よ。そ。上。に。云。へ。る。如
 く。い。ぬ。と。あ。ぬ。と。の。活。さ。る。の。不。同。か。う。と。を。辨。へ。む。と。て。よ。そ。ハ。又。よ。た
 き。た。う。ハ。勘。て。今。斯。迄。云。ハ。才。十八。段。の。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。と。才。廿。七。段。の。ぬ。ぬ。ぬ
 ぬ。と。の。け。ぢ。め。を。も。初。学。子。の。人。ふ。ま。を。さ。さ。ご。う。に。あ。く。せ。バ。や。と。思。へ。だ。ぞ
 か。し。孫。友。鏡。小。照。し。略。圖。を。も。考。て。其。細。や。う。成。る。と。ハ。活。語。指。南。を。檢。し。て。よ
 ○あ。づ。め。あ。く。あ。ま。く。こ。ふ。ま。さ。む。さ。う。境。い。う。小。の。ま。バ。う。あ。ま。ハ。た。が。あ。ら
 ち。小。う。と。あ。く。く。こ。あ。ら。郭。公。明。一。名。き。け。バ。あ。ま。こ。そ。ま。さ。れ
 △此。処。も。た。が。ハ。た。が。へ。と。云。て。た。が。び。と。ハ。云。ま。さ。あ。く。た。が。び。と。云。て。も。何。れ。ど
 そ。ハ。別。玉。鏡。の。才。廿。六。段

小おぐべき詞よて又別
 ちる思ひ涙ふべうす。又あふ。ハこひとハ云るれどこへとハ云れぬ詞かれば
 いとゆる三擧のふ。ああるるをば毛境とそのや何とこその証出
 ず本キに於てハ更いうぐハなられど、此語の系小付て云ハ、其年へ有と
 を慥せんぞ宮しからん、又序に云ん、此上小引る千載の分ハ才三
 句をばうと有ををぞうと誤さるよハあとしう。二首の趣りさ紙
 よてハたきうと思さるり。爾らバ老ハと爰の引証ハたとぬ奇
 なるべしとてこその下ハ巳に右引る感集あるハ年をへと兼の中あ
 又てよる老といひとあとで了そふれを出さぞよ然、経るハか
ぞあるいふがあるなどと全く同活なれバたり、又万八おふくと
 の奇ハ右よ云るやくへとハ活るぬ詞を、此處の恭後つらるれる所を紙

る遠つつななどの詞小類へ出さるハ、是ハ抄で代りハ六帖にあつけ
 てあらう花もあつつあらういふむとことのをいふとめは是らやよ
 々ん、これをん何の結のあらう下二段の活語よて一首の中らよて截ま
 たりハハらう、こその下に引る住吉奇舎の忘草了そ存尔おあまさも
 おひと活けどおへとハ活るのハ較あらう遠あらうたどの詞とをたく
 ひ難し、さらからに兼感集のを引ぞよき、

同

〇後万十九ほとぎ守いまきたきそむああめ草かづくとふらう目らめや
 △坊きを一首の中をならうよて証さバ万十九木言ハくて木極時
 鳥本明とよめて悉考すむ佛足石奇に初二三白ハ消すてあらうかたれ
 止死く有ハたの徒むの中よて截さる
 例も、終よてきれたる例よなるべし、

右三

○おひ志まむこひもあひとや 邦公物ありふけふきまきまきとよむ
 いまぐ又むーやううむ 漆芽系あきそふおのぬきうこひて
 △是も恨むハ恨みと云ひてうめとハ云まづくごよむハごよめとハ云
 てごよみとハ云まぬけぢめあり、爰に証可とせる初むまむ止む
 令憑むるとよむる 留むる 替むる 慰むるハ、河れもめと活く方の詞を
 きバ、爰も杖鏡十五のハ除て、其代りハ、赤人集^初 妻あきとまあや
 むる 雪の本末修ひてつづ ぞある 色らを引証あてよらん、
 △何むる 一首のすばよその例、^林ふむ跡もれとよりよものすみろ
 いくながむる 白川の星これ補入てよらん、^{此并拾玉にられ}
 ○格みやこ出てよハよやきつづ云云 ^{と定ぬ々のたふ}

同

右四

△此ハみやまの字誤なり、拾遺みひいろい、^{兼盛}未小、深山い
 てくと書るに後ふべし、こやこつてハ、せえ難し、さて杖鏡^やの処小引るな
 てーこ此の旁ハ、中移来異本に、^夢の^竹ゆると有、才三句ハ、杖の世
 かり、歌を考るに、三条の女卿あてーこ合せー移ふよと有て、^才四首あ
 其才四の小て、^夢の方よ、同ゆれハ、此引寄ハ、爰の^やゆの証とけ
 たりが、こー

左三

○不^右不^中不^左
 △徒の証、方七^ハ、妻日す、^田よこちつづ、^君はうなりも、こち、^草は
 つるあき、^田よ立言^脚補ふべし、^そ
 △爰たる、堀川後百の初句ハ、宿小く、^ちるバ、^てと有ハ、^等共の誤りか

るべく、さて^レ **徒**となれるハ彫刻人の悟まるよそ、^レ **徒**と系本^レ 有
 一^レ 成へし、又 **徒**の証^レ 一首のそとて、苗れる例^レ 万四^レ 白^レ ぬの袖^レ 云
 所^レ 流^レ と有^レ を引^レ べきうと思^レ ひ^レ 一^レ うど、そハ仙^レ 寛^レ 本^レ 然^レ あれど、さてハ^レ 所
 の^レ 趣^レ づえねバ、所^レ 流^レ ハ所^レ 注^レ の誤^レ とまて、こ^レ 上^レ の **徒** **也** の^レ 処^レ へ出^レ べき也、
 ○ **う** **右** **う** **中** **う** **左** 才^レ 卅^レ 二^レ 段^レ 以^レ 後^レ 流^レ 奇^レ え^レ う^レ う^レ 然^レ

△ **奇**の五文字七文字^レ こそ^レ の証^レ 奇^レ たき^レ 流^レ がく^レ 云^レ る^レ 然^レ れど、詞^レ 八^レ 例
 の **え** **も** **徒** **ハ** **う** **ぞ** **の** **や** **何** **ハ** **う** **ア** **そ** **ハ** **う** **れ** に^レ 決^レ ま^レ る^レ 然^レ れ、爰^レ 一^レ ハ
 斯^レ 物^レ せ^レ る^レ 成^レ へし、但^レ 其^レ 意^レ 故^レ に知^レ り^レ 乍^レ も爰^レ へハ出^レ さ^レ す^レ と、寛^レ 本^レ を^レ 今^レ ハ
 又^レ 爰^レ 小^レ 取^レ 出^レ て、縦^レ や^レ 又^レ 七^レ の^レ 句^レ こそ^レ き^レ る^レ 然^レ る^レ 故^レ だ、詞^レ の^レ 已^レ こそ^レ き^レ る^レ、
 処^レ げ^レ 小^レ 紐^レ 淺^レ 卅^レ 二^レ 段^レ の^レ 必^レ の^レ 如^レ く^レ 小^レ て、拙^レ 考^レ の^レ 例^レ 一^レ 全^レ 日^レ こそ^レ を^レ 顯^レ さ^レ ん^レ と^レ 成^レ

徒 **も** **え** **何** **や** **の** **ぞ** **こ**

経衡系

い^レ う^レ 然^レ れ^レ 大^レ 内^レ 山^レ の^レ 乃^レ こそ^レ 今^レ **大** **も** **そ** **の** **美** **を** **展** **う** **ら** **ん** **女** **ハ** **未** **まで** **ハ** **及** **ハ** **ぬ** **ら** **ん**
 伊^レ 七^レ 物^レ 語^レ 志^レ 榮^レ う **う** **と** **た** **よ** **す** **く** **り** **の** **ち** **ら** **バ** **云** **ん** **ら** **徒** **の** **例** **と** **し** **て** **考** **へ** **ん**

△ **右** **せ** **左** 才^レ 卅^レ 四^レ 段^レ 有^レ 處 **も** **と** **の** **之** **必** **と** **て** **其** **証** **奇** **を** **未** **と** **出** **さ** **る**
 行^レ り^レ こそ^レ 是^レ **や** **補** **ひ** **入** **て** **よ** **ら** **ん** **と** **お** **不** **由** **ら** **る** **奇** **等** **有** **そ** **ハ** **大** **と** **し** **て**

そこ空しせる処へ万四四春日野雨朝若雲之敷布二吾者恋益月二
 日二異二一みえたるなどを補ひ入れ徒と有処へ中よきれ万八二十
 時鳥来鳴とよまを却花のもにや来いとまハま一たを四の十九花を
 て何の結ひの二首の中よきれの処へ万十廿う宿に殖生したる秋えきを誰くめ
 も中よきれの例のの処へ万十廿う宿に殖生したる秋えきを誰くめ
 さをこれとあせせでをらを補入るべし、又その処千十あせせするを
 を引ると空しくぬはは一れとは古きに付て万十九「照月の心の
 水よとみぬまハやうてせオと光をそとを中若とてなハ六帖六ハ
 さら吹く風のぬまを心をさる人そをををらを出さる人を
 さらべき、さて又徒の処二首の終のをの証に、堀川百首の、よもの云、
 りがりままをを出せる意を推さる小下十、ハ徒ををいづとをま

川を吹く葉にと云るよりはは一古今たる、何人り云と事を毎一のべを
 小ねをを引りぬべく思はるれどハ句をもも活きて上廿一
 一いや瘦やを引る処の註も終ハ初学の思ふべき故との
 意あひ一ぞ何らん、然ハあれど、古の古今の句をれハ、彼、梅の香を標
 の花一白をせと云る方の詞一ハあらど、万十五廿秋野半雨保波須波
 疑波などの方のよを全く爰の和と成さるらどがし、抑一横た
 れど、句をと句と句との差めれとハ八衛上卷十、ハ論めいと
 案らなり、又よく并ふべし、さて又此補入をべき類のを序に爰
 に云えん、廿七「徒の処やの処の中よきれ、方七十、琴をられハるがき先
 例を欠らる処へ、方七十、琴をられハるがき先
 〇つ、らも琴れ下ひ一つまや菴れふ、あのゆりてれハる素性集
ありたいも例あり、

ありぬ致しよ、さうかゝに其まんハはも凌の結と云へきのミありて
そのや何の結しぬしハ先有るなき埋りたり、即六卷十五に
その再又也こハ云を

静めて業むれば自らもさる趣思知らる、極まり、然れど其中一の

ハぞや何よりハや軽きぬ、然る本末結ぶ格等の有る中に、稀ハハの

の結ひ乍らぞや何の結しけ類せて、はも凌のに類する詞も有るなり、

六卷廿三丁に引る於此の言、
此の有りたるに引る如し、さればよや此類ふこのまんハ右小云る如く、はも

凌の結のミなる大方の定りやれど又の乃結ひとなれる例ハ其日志

も非るなり、その何の結とわゆる、
そいぞけぢめ考ふべし、その詠奇を示さば、形怪兼につきの日
まぬぐ

大らうらさか
のそやくまをあん、久堅持あまのほ昔まじりてへくと又えたる奇、古字

本よそハハハの目えくもらさう、あん、くえの結ひとなれるたうれど、板

本の方によんバ七回、のそやくまを、あん、そのの結となれり、さてくも

らさう、あん、よそもわやくまを、あん、よそも、あんハ何れも小まれ既の

意のよそ、怪のよハあゝぬてらり、り、なり、の二、小將然云なるに

て明なり、形ふ意のあんハ、まべて將然云をうけ、怪のあんハ、
連用云をえたる定格なり、六卷係分一尚委く云べし、さて此類ふ言

あん、を、あん、凌の結とせるをも、爰に序に、みさバ、そハ先六卷、十三丁
より+

五丁
までに引る奇ごもに、おえたう、あん、うちを、あん、おまんとい

え、あん、風ハよせ、あん、笑を、あん、おむくを、あつくひ、あん、を

ど有をみて、六卷十五卷なる女の
けいあうら下なるを曉るべし、猶云を、熱て、あん、の、あ、小ぬ

ぬらぬ、又、祿と活くあり、又、然ハ活用せされど、折、あん、と、ね、と、並ぶる

有、斯く、其二の、あん、ね、よ、諸活語の、將然云を、受ると、連用云を受る

とに別るなり、古今難辨の如の詞小、今ハこれよりちやうつり。祢と
さひがひひけるをまじと云へるが如きハ、連用言を交たるなり、五巻

丁卅二 万葉并ハ舟出えしぬと祝まじり佐祢又ちやうつりこ祢たご卅一

ハ七巻三十 将然言を受くるなり、斯て其連用言を交たるハおち

まじり詞、将然言を交たるハ預ふ意の詞たれば、其祢の活くるを
を、んと交て、あんとたれる詞のちる様をも、毫に准へても、曉るべ

し、かまバ、祢あまき祢あまははも、徒又のの結ぞと云べし、されどぞ
のや何の結とたれるも、若に猶よゆと云人有人歎と、のハ思ハる

こととを神やあら。あん、続後拾遺十、こ小く、に云、云厭ひて後ぞあひ

あ。あん、是らハそと懸りたり、然ども、続後拾遺のハ、奥六巻十五、小さだ

むろろ如く、意得べく、さそ、其之、素なるハ、正保板本、け小、さ換あるう

へ小、古字一本ハ、此より凡て、全くぬけ、んを、校訂も、考さけ

れど、祢やあららん、の写誤、と季鷹の考のちる、宜うるべし、げに

い、うきに、も云、とよみ、トしたる、落句、祢や、ららん、トそこ、ぞよく

聞え、うる、奇なる、れ、猶六巻の、線分、合考、べし、活雑、四編、も合考

○三轉の外云

△此まじりも、猶活用語とぞ、思え、る、友鏡又略、図一、此を、もは、も徒、と

ぞ、のや、何と、こそ、との、三つ、の結、と照應、をべく、図を、頭し、並り、考を、し

玉、諸五巻、八丁、又六巻、十六、卷より、をも、うく、合考、ふべし、抑、その、や何

の結と云ふをりハ連ク詞と云べくそハふとハ文え能き換るれど前の
 ちやるん後ぞさうまう一と結二既三そ四の結とせらる一てもあるく又即
 六卷下ハ小川三源氏夕秀筆の秋一あ二も三ま四ま五と一え二千載十二
 の奇に一ほ二く三か四ま五ま六ル一ら二ぬ三ま四ま五又古今一悪小二め三と志四せ五バ六さ
 め一ま二ま三を四ま五ど六み七え八た九る一〇も一一知一二べ一三と一四云一五躰一六云一七へ一八つ一九き二〇を二一又
 に二二ま二三ど二四ハ二五何二六れ二七も二八つ二九づ三〇く三一詞三二を三三文三四る三五定三六り三七の三八辭三九た四〇る四一を四二そ四三れ四四志四五受四六し四七る
 かな一バ二ま三ま四ハ五截六断七と八連九躰一〇と一一を一二兼一三る一四た一五る一六と一七明一八と一九そ二〇て二一是二二を二三将二四然二五云
 二ハ一ま二ま三く四と五云六ひ七、八已九然一〇云一一二ハ一二ま一三つ一四り一五と一六云一七ふ一八、一九已二〇然二一云二二た二三る二四二ハ二五な二六ど二七云二八ふ二九
三〇も三一あ三二ら三三れ三四こ三五の三六結三七ま三八つ三九り四〇あ四一る四二
四三ハ四四字四五津四六保四七藏四八用四九机五〇の五一ま五二を五三こ五四そ五五な五六され五七ま五八ま五九枕六〇冊六一子六二ふ六三と六四こ六五そ六六よ六七ま六八ま六九つ七〇り七一な七二ご七三持七四多七五る七六
七七是七八に七九よ八〇り八一て八二知八三る八四べ八五と八六活八七く八八云八九な九〇る九一と九二明九三け九四と九五和九六語九七說九八畧九九圖一〇〇を一〇一解一〇二き一〇三が一〇四て
一〇五ら一〇六こ一〇七れ一〇八ら一〇九の一一〇こ一一一と一一二だ一一三を一一四寛

二せんとして古字を引なはして示
 せらるが活語指南なり合せ考べ

△徒 順孝にのまゝあつた二がつる 相さふぶ郭公とてあはるこ

ま一と云るを補入てよりん、但し板本ハ二そ三ま四な五れ六ど七、才二句ハ脱

字ありて、ゆえぬを、字本ハ取てだ、一換ふる、とつく、岡ゆんで、才四

句もその本なる、おと、きいといへをより、とまべ一、順朝臣の奇
 二ハ非るあり

〇のま

△能宣集が、まみた、よ、も、ど、り、せ、ま、ま、み、ぬ、と、何、を、あ、う、う、く、の

ま、ま、ま、二ハ連躰言のま、あり、又重之集、二そのま、せ、ま、ま、ま、

こと、ま、ま、ま、せ、ま、お、と、ハ、ま、の、の、け、か、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

花の結びよていさゆる連躰云のまうたる、

○おそるえまうと結ぶる例あり但し中芳結おにまうくと結ぶるこそまうれ云

△まうハ上に云る如く、截断と連躰とを兼ふれど、未だ已然云迄は兼ふればこそその結とならぬハ並よりさ有べきことなすを邪く云てハ人の未こそ人んと結ぶる例ありと云んが如し、人ハ截断連躰の二を兼たれハ、むも後そのや何の結と成さて其人を已然ハ縛してめと云故こそと云へばめとなるにあらばや今もまうをまうくと云へハ已然言故、即こそその結となるあり、然るも古くハ然結へるものいえずなるハ、自ら寄り来らざるのこたへめ

れバ、爰も図ハこそまうくと見ハあて有べきこと、初め志きられの証可以来、其例古き可ハ未ださうさうに固ての言よて時と後ハ後なる方のと出せるも、つらかハ、爰も彼五巻ハ、出せることかり、了そえきりまうとをいさを出し、まて宜しかるべきこと、今ハ思ひさうなり、猶云をまうとと文たるハ、己古くより少くぬをや、

○まうと云

△此も彼三條の大綱、懸らざるに、た友後必の如し

○たを境そのや何、了そ、いづもの結びよとあるハ云

△然らるハ、そなハち三條の大綱にか、まするにぞ有らる、此らなるはらきさいと云ハ云ひ、とも、つらうと云てハ山口葉に論し、まう

ふべきよはらうほど、かきいづきも下にさそをゆくゑて話ふほく[」]と
あるをよく味ひて、玉緒の意を度るべし、猶六巻つくの部の説をも
こよ分わらつて、八連用と云へると同一意をくたつてある[」]然る
に爰ハさる人のかろそやちらんハ、誤りて[」]ほくをもちちらんまづ[」]同く
きま[」]詞とせも極も言得なん秋そハ玉緒の本意小なりすとあるべ
し、さてそこに

玉甲

○[」]ほくハさるげよそ切まぎさるある。なるよそ[」]たづ[」]なれば、
△かくいへるハ少し、是も飽ぬてなり、下にさそをゆくゑてと云はく[」]
一首のたうぶ[」]有てあつてくい[」]たそこよそ[」]截さる[」]様[」]
なれめ、
なれどなるも、其例あきにあら[」]ず、重之集[」]九[」]ら[」]へ[」]て、むく[」]の[」]ま[」]ら[」]む

よまみをつゝ[」]秋のよのみもあくらめ[」]よに[」]是[」]ハ[」]
刊行の[」]よ[」]に[」]と云へる落句より、秋のよのみよまみをつゝ[」]とくへる格
板本也、

よそ、ほくハ彼[」]梅がえ小[」]云雷そありつゝ、やどりせ[」]云むまむくま
つゝ[」]まどのつゝと全く同じどすや、梅がえ小のものやどりせ[」]のも、
正くきま[」]よハあ[」]ねど、[」]心あき[」]く[」]判ハ云外小孩して、ほく[」]と云ひ
さうたる処をあらうくいへハこよよてきま[」]秋なりと云べくバ右重
之集たるも、[」]よまみをつゝ[」]の処をきま[」]と、若らくハ云べきよ[」]あ
ら[」]な[」]や、但し正保刊行の本よそハあ[」]れ[」]ね[」]なれば、玉緒小是らの
この論めのなきハ、[」]又小[」]も[」]あ[」]ろ[」]そ[」]う[」]なる[」]にハ[」]非[」]ち[」]なり、若うれども
[」]ほく[」]と一首のたそ[」]ふ[」]云[」]へ[」]る[」]が[」]、[」]何れも[」]意[」]を[」]下[」]に[」]含[」]め[」]た[」]る[」]趣[」]を[」]よ[」]く[」]た

老哲

○すうくばとゆゑのりよ上へつゝさる格なり。三の巻云云

△三巻^七「出せり」かどもをえり。その註「こまを救のうむと

思ハす」かたられ「うまうま」のよき云「有をも考るにげ小謂

らうとてだあり然し今爰に「すうくば」と有ハ少し給

らハ救思ふさうハ救のそ有てハ「すうくば」とぬれつと只を「とぢ

めたる」とハ聊^{ケイ}差別有やうに聞也こはうく考るに「すうくば」とぢ

めたるん必上へ及びせきさる処有つ又ハ云外の余意有うの二をい

さうと全く同く「た」とぢめさるよも此二有るなり只を「とぢめ

たるハ上へ及るに限り「すうくば」とぢめさるハ余意を含むなりと

あまもわきそころろろ「勿れ」即ち三巻^五「出せり」万十五乃可

秋をだり尔やつらつが裳ぬもぬ丸君が舟船乃強「こま」てを

い「此とぢめの」を「り」上の句へ立及びかゝる処なれば「は云外」小余

意有てをさまうべきなつむや「三巻」右小引る万四の「すうくば」

ら「こま」えい「こま」を「すうくば」小妹がたり「を」まねぬ「兄」同十人云

を「及」の「すうくば」た時「と」か「た」の「すうくば」後於「は」を

む「この」を「救」救の「こま」びつ「と」ろ「月」毎の七日あり「せ」を「是」らも皆

余意を「含」めたるあり「但」此「あり」せむ「た」の「さ」つり「録」を「すうくば」ぬと

「兄」を「強」「こま」てを「是」らハ皆「未」だ「然」らざるを云る「こま」ハ「あ」る

將然云を「更」たるなり「すうくば」の「は」已然云を「更」するなり「此」きた

ま「べ」たは「三巻」^三「り」に「云」べ「さ」て又「あ」り「上」へ「及」て「と」詞「ハ

きん「作」ら「言」ハ「介」合「め」の「こ」せ「る」も「有」注「難」四「編」一「い」ハ「バ」爰「ハ」省「ハ」

めをよく

○玉のをより分

○手冊五

○と

△とに限らざる者たるを、又稀にハ勢ひをまじくしようとせんとさ
えりしん思ふ者たるを、又稀にハ勢ひをまじくしようとせんとさ
らに然せしならんと又ゆるも有中、池をくうへあるハのうけられだ
けしけらるる「と」此らハ殊にわざとめつけをりしとみゆるを、
詮ハ是も只いしゆと一首の勢ひを強くせんとなめり、
三月三日ていどの指しそあみをとつらうて「は」がきあもなかりいれゆる
校かハへをよせれど、そハ古本のルるハあざむきそいきこえ難し、
○とあての云云下にをよくしていひまてゝあ云云

△爰に因に云せん、斯る例ハまじくて小敷く有ことなう、三巻「てむ」
より分合考、録分ハ雨の
第五丁巳下

○と

△べくと留るる守の上の句へ及びテ治まる截き処あるおげふ多かれ
どさやうにぬりのくより上へ及びて治まるし、只べくに限れるにう
どべくに内に活きさぬかる語字、鈕鏡・友鏡才一段の必に撰まる派り
と、又才二段たるハ、まじくてなくによくとさぬく云ひとちめてある
べし、然に爰にたぐべくにとのえ出せるをみて、ひとふるにええなべ、袖
学の徒ハ、べくに小服ちやうにもやあふべき、されバ爰ハべくの類とする
う、又ハ只くと標して、それを註して、状くハえを境ぞのや何の語の「ハ」あ
らむ、鈕鏡才一段の羽の「ハ」の活きさぬを「た」などやうに物と名んや空々ら
む、下「ハ」の長しとちめたるう疑も、抑べくにハく志きと用きて、鈕鏡
む、くにとちめたるなどを引を考ふべし、

つても反鏡よても才一般の詞よてべいと云へば、
連射言たるを、是をべくと云ふ、連用云たり、連用云たれバ
まをりたり、わり文になく、必それより下へ云連くる用云
り、即爰に出たると古ハの奇よて云ハハ、
んてつき、同六の奇よてハ人のちよて云ハハ、
など皆用云たるを考ふべし、又後撰十九に、
てき糸、^来さごめなき世の疑も、
同語、^{紐鏡友鏡才}、^{彼乃語たり}なるを、
万四、^六松の糸小月をゆつりぬりみちものむきぬや、
又十一、^{四十一}たこのみを望てやこひんまをさかみめよたよとてこひまくも

おほく、又廿卷、^{十一}初を花をさくらんらん天川へありしけら、^三年の

を、長く、^{十一}霜土より来たるし皇孫塔よりあまた、^二まわらん、^一年のを

長く、是ら皆く、より長く用云るなり、^二さて連用云を一首のいや

て小並る例を、^二斯くまきと活く詞ももの外も、^一狩りやと云へ、

あり、^二万十二、天川瀨々の白波あけまどなたぐらりきぬまろ、^一若し、

と云る類をたより、^二是ハ若し、^一まん若し、^二み若し、^一む若し、^二めと活くよて、^一若し、^二みハ連

へるよて、^二みハあらどぞハ、^一用云たり、^二若き若く、^一と活く形状の、^二彼若し、^一さしと云るを云

まろ、^二と云へるよて考ふべし、^一狩いとも、^二みく、^一へ、^二あなど、^一どめたるも連

用云よて止まると例よて、^二彼恒に多くみえあうがへるつ、^一あの前も即

例なるぞか、^二の連用云たるを、^一狩、^二さて又べくととどめたる処、^一上へ反て

尚も、^二其のまきろく処ハ、^一多くハ人、^二あ、^一あ、^二あ、^一あ、^二あ、^一あ、^二あ、^一あ、

色を希求[□]云とき[□]の云、又希求の上[□]勿きのあ[□]さてハきろく[□]ら[□]い[□]ま[□]
 かり、玉緒に出[□]る[□]二首も、一首ハ[□]お[□]へ[□]と云希求[□]よ[□]て[□]き[□]れ[□]今[□]一首ハ[□]お[□]
 ぎ[□]も[□]あ[□]ん[□]と[□]預[□]ふ[□]あ[□]ん[□]よ[□]て[□]き[□]れた[□]なり、古[□]夜[□]ハ[□]こ[□]え[□]ド[□]と[□]や[□]と[□]を[□]ら[□]る[□]べ[□]い[□]と[□]あ[□]、
 奇[□]ハ[□]上[□]に[□]お[□]え[□]あ[□]ん[□]と[□]あり[□]、[□]日[□]共[□]考[□]せ[□]め[□]れ[□]
 の[□]ス[□]イ[□]カ[□]る[□]べ[□]い[□]と[□]云[□]へ[□]る[□]ハ[□]上[□]に[□]を[□]い[□]て[□]か[□]ぎ[□]ん[□]と[□]なり[□]、[□]上[□]より[□]後[□]并[□]の[□]奇[□]ハ[□]お[□]と[□]あり[□]、[□]な[□]
 准[□]へ[□]て[□]あ[□]ら[□]べ[□]い[□]万[□]なる[□]も[□]こ[□]ひ[□]ま[□]く[□]も[□]ハ[□]お[□]ひ[□]ん[□]の[□]ん[□]を[□]ま[□]く[□]と[□]の[□]バ[□]へ[□]と[□]歎[□]息[□]の[□]も[□]を[□]添[□]た[□]
 と[□]ら[□]し[□]とい[□]へ[□]る[□]、
 未[□]ん[□]とい[□]ふ[□]事[□]あり、
 又[□]土[□]佐[□]日[□]記[□]、[□]雲[□]も[□]皆[□]波[□]と[□]終[□]り[□]ゆ[□]、[□]あ[□]ま[□]も[□]が[□]那[□]い[□]つ[□]ま[□]
 の[□]海[□]と[□]を[□]て[□]あ[□]ら[□]べ[□]く、[□]後[□]撰[□]十[□]五[□]、[□]い[□]ろ[□]か[□]の[□]ま[□]き[□]と[□]も[□]せ[□]ぬ[□]た[□]ひ[□]の[□]那[□]
 あ[□]ま[□]も[□]あ[□]ら[□]や[□]と[□]い[□]ふ[□]事[□]あり、[□]あ[□]ま[□]も[□]と[□]い[□]ふ[□]事[□]あり、[□]あ[□]ま[□]も[□]と[□]い[□]ふ[□]事[□]あり、[□]あ[□]ま[□]も[□]と[□]い[□]ふ[□]事[□]あり、
 一[□]つ[□]海[□]の[□]底[□]の[□]玉[□]り[□]、[□]う[□]つ[□]き[□]と[□]も[□]べ[□]く、[□]是[□]ら[□]考[□]ふ[□]べ[□]い、[□]又[□]古[□]今[□]十[□]九、[□]お[□]ま[□]
 携[□]て[□]つ[□]ん[□]を[□]だ[□]ら[□]も[□]あ[□]ら[□]さ[□]ど、[□]つ[□]ひ[□]ハ[□]い[□]ろ[□]あ[□]ら[□]る[□]と[□]あ[□]ら[□]べ[□]く、[□]是[□]ハ[□]に[□]云[□]
 へ[□]る[□]例[□]の[□]外[□]の[□]極[□]な[□]れ[□]ど、[□]是[□]も[□]ト[□]ハ[□]ざ[□]ら[□]ん[□]の[□]約[□]り[□]な[□]れ[□]ハ[□]異[□]なる[□]所[□]あり

ず、又赤人集三^{セド}^{ウガ}、[□]妻[□]日[□]あ[□]ら[□]み[□]ろ[□]さ[□]の[□]心[□]の[□]月[□]も[□]お[□]ぬ[□]も[□]、[□]せ[□]き[□]心[□]よ[□]さ[□]け[□]
 る[□]様[□]の[□]花[□]も[□]み[□]ろ[□]べ[□]い、[□]と[□]あ[□]ら[□]な[□]ども、[□]ぬ[□]も[□]ハ[□]預[□]ふ[□]意[□]な[□]れ[□]を[□]、[□]預[□]異[□]なる[□]
 に[□]非[□]ろ[□]を[□]考[□]べ[□]い、[□]又[□]後[□]撰[□]三[□]か[□]く[□]ち[□]か[□]ち[□]ら[□]て[□]よ[□]を[□]や[□]え[□]つ[□]て[□]ぬ、[□]花[□]の[□]
 と[□]記[□]え[□]も[□]い[□]ろ[□]と[□]み[□]ろ[□]べ[□]い、[□]是[□]ハ[□]ん[□]た[□]ん[□]た[□]其[□]外[□]希[□]求[□]の[□]詞[□]ども[□]な[□]ら[□]れ[□]
 ど、[□]此[□]や[□]も[□]つ[□]ら[□]て[□]ぬ[□]ハ[□]つ[□]く[□]せ[□]か[□]い[□]と[□]預[□]ふ[□]意[□]の[□]辞[□]なる[□]分[□]な[□]れ[□]ハ[□]是[□]も[□]
 預[□]甚[□]く[□]異[□]なる[□]ハ[□]あ[□]ら[□]ざ[□]ど、[□]い[□]ろ[□]て[□]ぬ[□]つ[□]く[□]せ[□]か[□]い[□]と[□]預[□]ふ[□]意[□]と[□]あ[□]ら[□]る[□]、[□]玉[□]緒[□]一[□]
二[□]尤[□]こ[□]の[□]分[□]を[□]奉[□]た[□]る[□]處
十[□]尤[□]こ[□]、[□]又[□]一[□]格[□]と[□]あ[□]ら[□]る[□]分[□]ども[□]、[□]并[□]其[□]の[□]説[□]と[□]玉[□]緒[□]廿
十一[□]尤[□]こ[□]、[□]又[□]一[□]格[□]と[□]あ[□]ら[□]る[□]分[□]ども[□]、[□]并[□]其[□]の[□]説[□]と[□]玉[□]緒[□]廿
十二[□]尤[□]こ[□]、[□]又[□]一[□]格[□]と[□]あ[□]ら[□]る[□]分[□]ども[□]、[□]并[□]其[□]の[□]説[□]と[□]玉[□]緒[□]廿
 る[□]に[□]、[□]伴[□]の[□]奇[□]ども[□]の[□]如[□]く[□]な[□]ら[□]ず[□]も[□]、[□]凡[□]て[□]截[□]る[□]、[□]云[□]こ[□]て[□]留[□]る[□]處[□]へ[□]え[□]か[□]ら[□]る[□]
 べ[□]い[□]と[□]思[□]え[□]ら[□]る、[□]ガ[□]コ[□]と[□]留[□]ま[□]ら[□]る[□]も[□]多[□]く[□]ハ[□]ん[□]と[□]、[□]或[□]ハ[□]下[□]知[□]の[□]云[□]ども[□]へ[□]く[□]る[□]極[□]な[□]れ[□]
ど[□]う[□]考[□]れ[□]ハ[□]さ[□]の[□]こ[□]も[□]あ[□]ら[□]ざ[□]ど、[□]七[□]巻[□]の[□]分[□]こ[□]云[□]ん[□]と[□]す
又[□]考[□]
 る[□]に[□]、[□]此[□]く[□]志[□]き[□]と[□]活[□]く[□]形[□]状[□]云[□]の[□]く[□]よ[□]て[□]留[□]ま[□]ら[□]る[□]分[□]の[□]、[□]其[□]上[□]へ[□]及[□]へ[□]れ[□]ら[□]

処のいとも頼ふ意下知の詞又人あぐなすぬハ多ハあすれどがし
もなきにえぬるなり順業に^ハ山の雪^ハまにこゆるあすれ木のうたへ
いぞく^ハ西^ハのこもつみる^ハく^ハと有など

右六

○控上へうなるめの格ハ右結條^ハの外^ハをわか^ハし准へるべし

△げふ然り今古今業の中たうさうぬもたき処小又及べ^{トモ}等^ハ

聊差に補ひ並べ^ハ状上へ及る或ハ云残^ハて云外に截る^ハ詞有え

想て之を考るに皆用^ハ云へ連く^ハ詞どもあり^ハそハ活用^ハ多^ハ詞小^ハすれ

初^ハぬにまれ必用^ハ云へ連く^ハあり^ハ言^ハを付^ハべし^ハ活初せざる語^ハて必^ハ辨^ハ云

く言葉少^ハらぬ^ハなり^ハへむうつ^ハてた^ハ用^ハ云へ連

ため

伝及不^ハ

い^ハのよう^ハら^ハり^ハま^ハさ^ハら^ハる^ハも^ハま^ハい^ハま^ハい^ハの^ハこ^ハを^ハい^ハま^ハせ^ハ後^ハを^ハ乃^ハい^ハめ

い^ハの^ハり^ハる^ハた^ハき^ハた^ハく^ハも^ハが^ハさ^ハら^ハる^ハ花^ハも^ハお^ハて^ハも^ハあ^ハん^ハい^ハぬ^ハ人^ハの^ハい^ハめ

まくに

お^ハと^ハあ^ハる^ハ中^ハさ^ハら^ハる^ハこ^ハハ^ハ解^ハる^ハ一^ハ種^ハ別^ハ一^ハ例^ハと^ハも^ハ云^ハべ^ハき^ハさ^ハぬ^ハわ^ハれ^ハば^ハく^ハそ^ハの^ハい^ハち^ハを^ハ出^ハま^ハせ^ハら^ハう^ハ

い^ハの^ハり^ハる^ハた^ハき^ハた^ハく^ハも^ハが^ハさ^ハら^ハる^ハ花^ハも^ハお^ハて^ハも^ハあ^ハん^ハい^ハぬ^ハ人^ハの^ハい^ハめ

い^ハの^ハり^ハる^ハた^ハき^ハた^ハく^ハも^ハが^ハさ^ハら^ハる^ハ花^ハも^ハお^ハて^ハも^ハあ^ハん^ハい^ハぬ^ハ人^ハの^ハい^ハめ

かくに

お^ハと^ハあ^ハる^ハ中^ハさ^ハら^ハる^ハこ^ハハ^ハ解^ハる^ハ一^ハ種^ハ別^ハ一^ハ例^ハと^ハも^ハ云^ハべ^ハき^ハさ^ハぬ^ハわ^ハれ^ハば^ハく^ハそ^ハの^ハい^ハち^ハを^ハ出^ハま^ハせ^ハら^ハう^ハ

梅の花さきぬ^ハ枝^ハの^ハふ^ハい^ハれ^ハゆ^ハん^ハ若^ハが^ハて^ハう^ハり^ハを^ハ可^ハ多^ハ麻^ハ知^ハ我^ハ底^ハ良

の^ハが^ハり^ハゆ^ハけ^ハ位^ハの^ハや^ハぬ^ハら^ハも^ハみ^ハま^ハそ^ハも^ハへ^ハま^ハち^ハお^ハし^ハま^ハら^ハる^ハも^ハえ^ハが^ハて^ハら^ハう

ま

ち^ハと^ハい^ハぎ^ハん^ハら^ハう^ハら^ハあ^ハま^ハけ^ハば^ハあ^ハぢ^ハま^ハさ^ハう^ハわ^ハし^ハま^ハら^ハぬ^ハ意^ハせ^ハら^ハう^ハま

後掛九

くころもきそつりあしつれぐらにれとあふを紙むらん

ガ

こ八方に八截断云に旨で、おもむめが紙と紙も、連軒下つけておひバ
せうが紙と紙もあふ後々ハたご云こハ活雜四編下誦論也、

吉七

さうさちりうひらもきをらへのらんといふたるみちまがふ

万十

たちむちの林をうそん 本とぎれつねをまぐそくそん

ケ

万十七七

ふーたよれここの心をさるれどつらうつられく あをみひ

音 来 改 糸

不得

ミ

是ハく志こと活きおとあきと活く語こそ、玉散さよと誤りたまのみをる
但珠みださよとてハ、おぬべののみなど通し、新き新等活雜三編に具にせん、

万十四

みよーゆめいさりころんあつづつらんもあきらま

吉十一

秋の物のをちれしどまはさく花のこよあせん けふしをちみ

又 **み**

是ハみむめと活く語の連用云あり、但然活くコハ、けつくまきと活らる
方こそ、いそやとよと誤るると別なるべも云入らん、なほよく考ふべし、

万十後五

天の川せのあつちみあけきとたごころのあつち

又 **み**

是ハ連用云をきてみと云るこそ、たとと誤るべきあり、後拾一なる紙にさつ
のそむあしのみえみえとみとつらあきハ、云かおその止る処ハあろなり、

万十三

こひちくえちまをとりむらさねの紙をちのころも

ゆ **め**

吉十三

こひちくえちまをとりむらさねの紙をちのころも

万十後七

あつちみえちまもみちわれゆ依てろ敷てそま低知里許須奈

む **かり**

万十二
たなかくし人とあらばえ業よもあはまうりのを『玉之緒』ハナリ許

の まじりあきまをいふくまのこころのこころをさうなく小と云るまきハ、
分のたうまがし人のと云処ハのこころと云るまきと云う

古十一
吹まよふ世風をさむみ秋も花のうつりもあくう人のこころの
風雅
おひよてぬあはかくこそねわられ まごあうざうし人のこころの

のみ のみと云く漢籍読ハきさう処よいども、雅語ハ必用云へてくたうこれハ
のみとこぢめたるおハ必及る処者とあるべし、さうハ云外につく用云らう、

後十一
いぢなれたあはぬ工ねあうねあはく や さうらう人あれむのみ
万十二冊八
あちのまむまの入に乃ら さうまの まをまうて た 但 一 耳

こハありと云記云外に含めり、序小まらうらうにきのおもをきさけてあまハお
はく只一上の日本記 はも余を含するなり、二巻ハ、のうりけ合来へ
さうといつるをうりよう上へううてあれ、例ハ、はに多うり、さうをさうて
古きとこらうて、中昔をさうと、まづ、お、お、お、

万十二冊八
りのあはといふむねきたるおけハ さうびて あうり 小まの ま 左倍
中格系
風あけたれもあゆるま は う の あ ま も ら ぬ 君 さ へ

だ う

万十
あひーらけ長きりのを今だ小も さ う び べ や ま べ き 後 だ う
後拾十六
あーとてあけまあはらうん秋のあも ま て か は の さ げ う り を だ う

ほ ま を 連 用 云 く こ ろ の 義 論 一
条、活雅三編のせとり、

万四
あよたえかま小まをちゆけとひあ う を そ せ う ゆ ま を ほ ま
万十二冊
くみやま夕あう雲乃 カスラカバ 薄 往 者 ひ れ を こ ゆ へ あ 君 が 先 を ほ ま
ユツリナバ

あ う く み く か く か く の 類

拾三十
世の中小あうそえうまき あ う ゆ き の う ハ き え あ う り の あ う く

後於三 神ぬよこそ扱つりぬれ ほとぎれきく秘もちき一了ん一 了ん一

か

扱あつかうこと有ハ玉の供出で、あかききん云、あまふもの云ハ二首を扱め
皆物を扱意のなり、今ハ從のころをくわのりきり

万十二 いろはしるたるみのこの早敷ハ妙君尔恋良久 ころ情 柄

万四新勅 こひくさをちうら車一七ころはつとこころら 吾ころろ かく

也

人の見也ふはちとハいと多うれど、ハル世の中ハ世ハ只也まよとまたらを
奉又ハの世もとふたは、ハ玉供に有とて、まかうちり、今ハ因故の故あり、

伊田何極大甚利心乃失念 恋故 此恋故古点コララクノユエ之を、コララクノユエと改むるハ
イデイカニイカクハナハカト 恋スニ風、ユエ 此恋故古点コララクノユエ之を、コララクノユエと改むるハ

それ

万八廿八 つくもぬよもあけせハほとぎれやまむことよめ 鳴麻志也 其

右等の外に、駉云るりの秋の、其あがりより上へ及びてきりもま

後持 卯花乃さけかまねの月清みのびきけとやなく ちとぎれ

費之 汝川いづもみまうとちやあれバせきぞうひつろ 神の志くみ

兼下 えてくがな 二葉の松のむひあがり八十氏人乃うあとならん世

え補 兼下 類ひい、夥し、その中ハをと詠へて又べきりり、よとくしてべき

有はとくしてべきなど有考て了るべし、すべて并語首りけ等ハ上へへ
兼下 有はとくしてべきなど有考て了るべし、すべて并語首りけ等ハ上へへ

○ 重あちておをけの格

△ 此まろておをけハ文章早ハ珠に多く、其まろれる処いと長き

詞にて、初学此徒ハいつちうと上たるぞ、や、その類を忘れても存ら斗

右

たつたか、それをよく尋へんよハ先言よハ賞えちるよよハこれハ秋集ハ別
て心とむべく、秋丁九○二ニまふそののちて小を云と有教へて、殊よ
く考ふべきなるぞかし、

○變格

△秋ハクハてよまはの考れ格小かく変まらぐ巧なるため、躬恆集ち
る久よハぬ人をまらよやあえぬらんときくの恋とこれハなり、
も引れぞと有てハ拙きを思ふべし、爰に引る後、あち君詩云この言など
のハ五七の句をよ字教られど、十三とこ交結の言、右躬恆の言をこ
れハ、まと物せると著し、そ秋ぬるの上へ今二まと標してハ、後十二ま
とろまぬ物とらし、まとるも不現ふもつぬん比のまと挙げ、まら

くろと標して、貫之集下、を某れくれも果ちる、あうまがに今とて、事れえ

かまにのくろと出し、くろのあうる人、ぬる、え浦系、くれて、後う

しろめたきを山樞風の考ふ、ぬる、ぬるハ下二段活語、ぬるも下二段

出し、ぬると云る人、ぬるハ下二段活語ならむハ、秋羅行也、行
のたれば、ぬるハ、ぬるの並ひへ

○ぬるひ小あひて、ぬると云る月、ぬるか不、ぬる

△上の件、ぬるあち君詩云、ぬると云る、ぬるを引るより、ぬる秋のよハ云

え、ぬると云る、ぬるを引る、ぬる同つ例の變格、ぬる不然、ぬるハ云と云る、ぬるなるを、

其中に、此ぬるひ小あひての奇の如く、ぬると云ると云て、ぬるの有て、ぬる其、ぬるを連
躰、ぬるを結べる、ぬる万葉より、ぬるの集、ぬるに自ら、ぬるけ、ぬるを代へ、

○辞を加へ、ぬる云

△げふよく辨へる者か凡連射云くそ苗まて二一首の全射りく宜
奇なるを考るに、何れも何れの詞を云送せるを、中務と結伝明集善教その

中 五月あハ若くや有らん郭云くもぬきをあらわつと有を味み

るに、「ハぞか」といふ心ならん、二ハ其及しと有、いふてハ其とめつる郭云

類け小多るべし、さて上ハより爰迄変格とて出せるぬるつるを何

も一首の強たるのなるを之、小従ひつ、推考れば其つ、く詞こそきき、

詞ハ何れぬむら、そのきき、様にあたはる、一首の字をた有奇も稀小

ハ有るなり、赤人集二表のき下なく、三流りたる様花らりぬべし、四ありみ

る人もかもし、此分れる、ハある、の字語をど、ハ何れし、五即ち板本写本

此あるハ、彼宿る、月くぬる、六の類とぞ必はる、七流ハ古写本、八谷ハ正保板本、

右十三

○主老日記 赤髪二の雷く、三の白波く、四いつと、五まさ、六きき、七ねき、八あ、九波

△此奇落句ハねき、一をま、二り、三り、四り、五暗記の失なり、

○十八百日ゆく、十一溪の暮砂と、十二口く、十三い、十四と、十五と、十六おき、十七月、十八ゆ、

△万四廿八百日往瀆之沙毛吾恋二豈不益欽奥島守と書る、仙覚本にハ

才四句「アニサラマヤ」と有を、「アニサラシカ」とハ改読る、一そ、二今、三爰、四乃、五異

書なるハ、その方、一そ、二なり、三く、四く、五た、六と、七なり、八初、九学、十れ、十一索、十二搜、十三の、十四仗、十五、十六此、十七を、十八云、十九と、二十並

○右の件云、一ある、二も、三る、四な、五ど、六路、七へ、八き、九定、十まり、十一ある、十二紙、十三不、十四と、十五の、十六て、十七と、十八と、十九紙、二十

べし、ハ、云

△万三廿磯上一云、二何在、三登、四同、五十一、六朝、七茅、八原、九云、十何在、十一云、十二此、十三ら、十四を、十五い、十六つ、十七は

読め、一い、二く、三る、四り、五と、六よ、七む、八に、九よ、十る、十一ハ、十二日、十三例、十四と、十五云、十六べし、

○うのちの云 いづき やと ぬ む つ た き の 云 い づ き は ゆ め

△此二首八いづき む つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

字誤もさういふ ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

てハあらド云べし ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

ガヘ ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

又按 ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

の結のつハ ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

さハ ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

下レハ
活言徑 ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

と何 ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

らし ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

討たれば何とにみてもいづき ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

のハ俊成々たるをも思ふべき ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

は ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

読もふさ ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

いづ ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

二 ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

と云ろを始 ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

いつ ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

は ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

云てハ異 ぬ め つ た き の 云 い づ き は ゆ め と り り き り り を

くまてこ。と格に辨して又ても亦其意味を極くにあつて斯て
 考るに件の身ども詠を多岐、こハわざとかく物せん、こハ又ハ心志
 らひせらハあらじ、こハ其理りかりくとハ云、雅、れど自たる云、並の然
 る格と受、れバ、変格と云べきにも非らんとさへつハ思つる事なれど
 そこハ狩ちの類ハ、まべて連躰云、あて結、小例たる方、うまもかゝる大
 変格と云てあるべきがうへ小、次、小云、下をも考てよ、さそこにある
 人告て曰、活言徑と願せら書に、宣長が紐統十九段のぬ、廿段のつ、是を
 いくの結、ひ、た、く、変格之事、此ハいくと云ても下にかといへぬ、対ハ必ぬ。
 つ、と、た、く、な、ま、又、下、ま、か、い、へ、ハ、み、ぬ、つ、と、結、ぶ、也、又、廿、六、段、の、つ、廿、七、段
 の、ぬ、廿、二、段、ま、て、ハ、ぬ、つ、と、結、ぶ、と、ち、い、く、い、へ、ハ、か、文、字、あ、く、て、も、必、ぬ、つ、

つ、と、む、ま、ふ、ち、り、と、云、と、み、え、う、り、此、身、論、い、く、と、云、り、げ、小、こ、ま、ま、
 き、と、く、云、べ、し、但、し、狩、い、く、と、ち、ふ、趣、も、り、り、活、雜、三、編、小、論、せ、り、如、
 段のつハ廿段のつ、と、り、り、と、廿七段のぬハ十九段、
 のぬとハ、何らぬ、ま、云、ハ、ぬ、も、飽、ぬ、ぬ、地、ま、る、か、り、
 の結を截断言、と、せ、せ、る、例、を、り、ま、
 次に云、そのや、の、結、も、此、一、類、せ、ら、あ、秋、の、論、の、な、ど、を、も、考、へ、き、ち、ん、
 云ハ、文章、一、此、い、く、に、ち、り、ぬ、
 とやうの例なきをもあ、
 一右字を、ま、ま、て、而、首、の、
 普通の、一、異、ち、処、少、う、
 頃、ナ、と、云、ら、ら、ん、こ、ハ、序、に、爰、に、頭、を、甚、
 爰なる変格の條、一、ハ、入、ら、ら、る、な、り、
 序に又ハ、えん、上、に、つ、
 の云へる、新、た、か、を、み、り、の、系、三、の、身、の、身、四、句、の、
 こ、き、と、て、り、と、右、い、く、む、ま、び、つ、な、ど、に、類、へ、ま、る、
 ち、く、べ、
 などの例を示せら、に、同、格、な、る、を、い、つ、
 して、と、百、八、首、四、繪、本、ハ、あ、り、

此玉のを
 小、ま、ま、
 出せるをみても思ひ、或ハ又
 此小論片
 山某かも

い、く、一、孫、さ、め、を、
 頃、の、笑、言、
 本、小、一、れ、れ、
 序に又ハ、えん、上、に、つ、
 の云へる、新、た、か、を、み、り、の、系、三、の、身、の、身、四、句、の、
 こ、き、と、て、り、と、右、い、く、む、ま、び、つ、な、ど、に、類、へ、ま、る、
 ち、く、べ、
 などの例を示せら、に、同、格、な、る、を、い、つ、
 して、と、百、八、首、四、繪、本、ハ、あ、り、

さて八五並一ふ既に○定まれも格うてまじと云
つる案に入べきなれどそれよりハたれりれを

○右の文どといひ、いひ(ま)ばま(さ)れどまてま(ま)いづく(ま)て(ま)ぬ(ま)こ
まを同格あり

△考るに彼伊勢物語オノハハいづく(ま)て(ま)ぬ(ま)こ

別まのちま(ま)川(ま)まで(ま)なども同格あり、これくま(ま)とま(ま)なるハ(ま)別(ま)キ
るやう(ま)もあれ(ま)バ、そ(ま)ハ(ま)の(ま)十(ま)二(ま)小

一条尺 えり さて古き所(ま)といふ(ま)る(ま)万(ま)葉(ま)八(ま)冊(ま) 誰(ま)聞(ま)都(ま) 亦(ま)也(ま)鳴(ま)ら(ま)る(ま)か(ま)ら(ま)う(ま)の(ま)

のま(ま)よ(ま)ま(ま)の(ま)之(ま)知(ま)左(ま)寸(ま) 是(ま)ら(ま)も(ま)ま(ま)つ(ま)と(ま)云(ま)べき(ま)を(ま)つ(ま)の(ま)云(ま)へ(ま)る(ま)例

と云(ま)き(ま)依(ま)何(ま)の(ま)類(ま)の中(ま)も、た(ま)れ(ま)ハ(ま)た(ま)れ(ま)り(ま)と(ま)字(ま)添(ま)て(ま)云(ま)ひ(ま)し(ま)た(ま)が

と云(ま)せ(ま)ら(ま)と、只(ま)た(ま)れ(ま)と(ま)云(ま)ら(ま)と(ま)の(ま)に(ま)於(ま)て、聊(ま)も(ま)ま(ま)有(ま)て、只(ま)た(ま)れ(ま)と(ま)云(ま)へ(ま)る(ま)

ハ、趣(ま)その(ま)小(ま)の(ま)類(ま)全(ま)同(ま)と(ま)云(ま)ね(ま)き(ま)格(ま)思(ま)は(ま)る(ま)も(ま)有(ま)され(ま)ど(ま)右(ま)た(ま)ま(ま)

ま(ま)つ(ま)ハ、同(ま)つ(ま)ハ、誰(ま)ぞ(ま)と(ま)同(ま)り(ま)ら(ま)う(ま)と(ま)ま(ま)つ(ま)の(ま)に(ま)関(ま)つ(ま)や、と(ま)云(ま)言(ま)の(ま)あり(ま)た(ま)和(ま)へ

ま(ま)に、津(ま)津(ま)哉(ま)登(ま)妹(ま)之(ま)同(ま)勢(ま)流(ま)ノ(ま)鳴(ま)者(ま)ま(ま)こ(ま)も(ま)を(ま)ち(ま)れ(ま)ま(ま)う(ま)れ(ま)り(ま)と(ま)あ

れ(ま)バ、誰(ま)き(ま)つ(ま)ハ、明(ま)小(ま)い(ま)く(ま)む(ま)ま(ま)び(ま)し(ま)の(ま)類(ま)例(ま)なり(ま)ら(ま)う(ま)と(ま)ま(ま)斯(ま)た(ま)と(ま)い(ま)づ

い(ま)づ(ま)ま(ま) い(ま)く た(ま)が ち(ま)小 い(ま)づ(ま)く ま(ま)ど(ま)に(ま)の(ま)か(ま)る(ま)例(ま)ハ(ま)有(ま)り(ま)と(ま)思(ま)へ(ま)又(ま)そ(ま)の

や(ま)の(ま)結(ま)こ(ま)も、之(ま)小(ま)数(ま)せ(ま)ら(ま)り(ま)と(ま)云(ま)へ(ま)き(ま)ま(ま)ら(ま)ら(ま)び(ま)さ(ま)思(ま)は(ま)る(ま)中(ま)に(ま)ま(ま)づ(ま)や

と(ま)懸(ま)ま(ま)ら(ま)ハ、順(ま)来(ま)に(ま)タ(ま)れ(ま)バ(ま)い(ま)と(ま)依(ま)り(ま)き(ま)大(ま)み(ま)川(ま)か(ま)ら(ま)止(ま)る(ま)と(ま)や(ま)清(ま)ハ

つ(ま)り(ま)も 也 こ(ま)ハ(ま)也 を(ま)始(ま)と(ま)終(ま)と(ま)に(ま)ま(ま)て(ま)よ(ま)ま(ま)ん(ま)と(ま)ま(ま)ら(ま)ら(ま)な(ま)れ(ま)ハ、字(ま)誤(ま)を

ど(ま)の(ま)疑(ま)も(ま)ま(ま)を(ま)い(ま)わ(ま)ハ(ま)き(ま)ら(ま)語(ま)故(ま)や(ま)と(ま)云(ま)へ(ま)バ(ま)い(ま)や(ま)ら(ま)と(ま)云(ま)へ(ま)き(ま)な(ま)ん(ま)毎(ま)の

字(ま)り(ま)な(ま)る(ま)を(ま)か(ま)く(ま)也(ま)と(ま)當(ま)た(ま)ら(ま)う(ま)と(ま)あ(ま)ら(ま)ま(ま)す(ま)小(ま)く(ま)ハ、あ(ま)ら(ま)ぬ(ま)ハ、是(ま)も(ま)一(ま)の

例(ま)なり、才(ま)四(ま)句(ま)の(ま)や(ま)彼(ま)大(ま)人(ま)ハ、あ(ま)ま(ま)や(ま)ま(ま)ど(ま)の(ま)如(ま)き(ま)ま(ま)ら(ま)や(ま)の(ま)言(ま)あり(ま)と

○マエされば、只変格と云てや立べうらん

万十の十四丁、敷細布林人事向裁其枕苜生負為、此如何様よ、訓みて

ら、べきに似、ん、尚占点の保、うそ、うん、と、思、え、る、を、其、古、点、に、依、る、と、き、は、お、き、た、へ、の、枕、せ、い、ん、こ、と、へ、 **や** その枕、ハ、こ、け、む、り、 **たり** と、や、を、な、あ、ぐ、し、未、を、 **と** ハ、あ、め、 **の、** た、り、 **な、** ど、の、類、の、変、格、と、を、 **も、** 云、べ、き、久、狩、考、べ、し、 **あ、** て、又、の、と、本、の、掛、れ、を、其、未、を、 **ハ、** 恒、ハ、 **え、** も、 **後、** の、 **結、** と、

云る彼、截断言、て、結、へ、る、変、格、の、奇、ハ、此、と、ハ、一、堂、又、三、堂、 **さ、** て、ぞ、と、 **掛、** り、て、 **結、** ひ、 **截、** 断、 **云、** な、 **る、** ハ、 **せ、** り、 **た、** 云、 **へ、** き、 **飲、** 才、 **思、** へ、 **ど、** 彼、 **二**

卷十八丁の録分に **至、** り、て、 **云、** らん、 **如、** く、 **羽、** 恒、 **集、** 拾、 **送、** 君、 **若、** き、 **な、** ど、 **に、** **花、** う、 **と、** **ぞ、** ん、 **也、** 袖、 **う、** **と、** **ぞ、**

又、 も、 **ど、** こ、 **え、** た、 **ハ、** **や、** ぐ、 **て、** **此、** **い、** く、 **む、** ま、 **び、** **つ、** か、 **で、** **火、** る、 **と、** **や、** **消、**

ろ、り、も **也、** 又、 **彼、** 三、卷、廿、三、丁、に、 **引、** る、 **拾、** 玉、 **乃、** 取、 **の、** 袖、 **の、** あ、 **ん、** に、 **ら、** を、 **ち、** ど、 **の、** 類、 **の、** 変、 **格、** ぞ、

と、云、て、 **も、** **立、** べ、 **き、** コ、 **や、** ハ、 **ぞ、** の、 **や、** 何、 **の、** 結、 **を、** た、 **も、** 後、 **の、** 如、 **く、** と、 **ら、** と、 **扱、** つ、

一の変格とや、**レ、** **ウ、** **ん、** **の、** 乃、 **結、** を、 **通、** 例、 **コ、** **た、** **ウ、** **へ、** **ら、** **ハ、** **珠、** に、 **多、** う、 **ら、** **り、**

○**あ、** も、 **あ、** も、 **神、** を、 **月、** を、 **近、** く、 **し、** **心、** **の、** お、 **ら、** **る、** **へ、** **又、** **舟、** **に、** **ら、** **で、** 其、之、ナ、ド、 **等、** の、 **ハ、**

友、 **後、** の、 **必、** の、 **き、** ま、 **ん、** **を、** **舟、** **べ、** **し、**

○て、**小、** **を、** **け、** **不、** **調、** **奇、**

△比那能歌語、ハ、云、玉、緒、二、卷、一、の、二、を、**不、** **調、** **奇、** **と、** **出、** **せ、** **ら、** **七、** **大、** **ら、** **と、** **云、**

書、 **字、** の、 **混、** コ、 **り、** て、 **今、** の、 **本、** 一、 **ハ、** 子、 **二、** を、 **後、** の、 **た、** **り、** **ひ、** **を、** **ら、** **と、** **云、** **へ、** **り、** **是、** **ハ、** **実、** **大、**

然、 **べ、** し、 **同、** **書、** に、 **撰、** **集、** **家、** **集、** **等、** **成、** **字、** **誤、** を、 **異、** **書、** に、 **依、** **て、** **正、** **せ、** **ら、** **も、** **性、** **見、** **へ、** **し、**

○**何、** こ、 **き、** を、 **異、** **書、** に、 **見、** **え、** **ら、** **れ、** **ま、** **し、** **と、** **ハ、** **キ、** **に、** **見、** **え、** **ら、** **れ、** **も、** **な、** **き、**

上、 **り、** そ、 **の、** **や、** **何、** **を、** **け、** **て、** **小、** **を、** **い、** **ま、** **し、** **て、** **き、** **と、** **あ、** **れ、** **ら、** **る、** **ハ、** **代、** **集、** の、 **中、** **に、** **ハ、** **い、**

△**此、** **古、** **今、** **集、** の、 **秋、** の、 **と、** **既、** **思、** **ひ、** **ハ、** **さ、** **バ、** **ウ、** **り、** **何、** **で、** **も、** **精、** **う、** **ら、** **れ、** **玉、** **緒、** に、 **か、** **く、** **ら、** **れ、**

バ、 **諸、** **本、** **皆、** **思、** **ふ、** **う、** **も、** **な、** **き、** **と、** **有、** **ら、** **る、** **を、** **あ、** **ら、** **ん、** **然、** **に、** **今、** **世、** **に、** **お、** **ど、** **こ、** **れ、** **も、** **一、** **本、** **致、**

蒼生のおくまひり、
 假名を正せる本、
 一ハハに「アなるもな」と有て、キと有本「ウの由の校
 異だ」をハ、カ賢あらに改するも「ウと思ひ」り、ク徳考をハ然「ハあ
 らで、キと書る本の悪き」を、ク素より「ウを付不調哥」とて爰へ出
 すべき「ハあらん」し、ニハ下廿三丁小「ウ本不ウを付を写し
誤と「ウと云へる衆、こウもす」たり、撰集と撰集古今
 集に出るに、作者も他者あつべき平君の言なれハとて、ウ彼の撰
 考を取扱めするに、件の假名を正する本たるも、ウ怪アヤシキる假名の誤りの
 多る板本の古きの、又ハ字本にも、ウなるもなし「ウ有も色被
 え」れハ、今ハ明小よりぬ、玉結小評せる、キりの本ハ只其本の悪きに
 乞あたる、ウも何事もイ最イ精イきイ書の中、殊下ヤク廿三丁小、秋の野に「ウひ
よと大あく、ウ古今を挙るウ六帖一本に、ウとあるを用ふべし」と

までいへるをこれハ諸本の校訂を小至するたるに、爰の如カは
 そもいへるより、ウハ下ニ小「ウ本不ウを付を写し」語るも「ウとある
 述小たうハこそ出ても並べられとぞ思ふる、ウ又かた「ウ上
ウき」とぬれらるる、ウと云てハ、ウむげの初学、ウ思ひそめてウたうと、
ウき」とぬむべきが故小きとぬる哥を「ウふ」と訝イりなどもす
ウ者ん、爰ハ上「ウそのや何考して小を付なく」とてウきと活ウく詞
ウきととめ「ウう」と云えらば、ウ八代集の中に「ウ一首のミあり」写誤「
ウや」など推し云くより、ウ秋、ウハとぬれ、ウ古今集の言ハ本「ウなるも
ウな」し、ウを恒の格小異なるに非れハ、ウそのや何考の辞なくとて、ウの
ウきと活ウく語をウきと云とちめらるる、ウハ八代集の中に「ウたえて一首

もな」と云ふらんぞ空ろるべき

伊し「まき」をハこそ、の法とちの等、のて、七卷七丁よりつけ合せ考、

○新秋 十八 おどふ 自下の八首、大方右古今集の、如く、後人の誤ミても小ぞららん

躬後集

○このまよを風小まがひうある者を去るといへも花うと [そ] 入也

△こハ上 十四卷の 小云る如く、変格と云て有べきう、然らば又いへん、そも

正保板の哥仙集ハ悲多れば、歌奇ぞハハの語、又ハ也。字。るの訛を

らんも計り難し、彼匡房々のいへせじをいへまふと有本にのこ依

て 玉緒六の 議せらハ今名ハいと憾ハぬべきてなるう如く、抄て右歌を

バ漫ハハ評め難れば、此らも且く疑ひてのこらうへくそ男よ、玉緒固より考

るやうの各ハあらざれば、此らハ小をけ不羽番と標して、数ぞあけらるハ、何れ、其等の作者のひうこなりと云ハあらざれば、其さう見らるハ、よりに、此ハ小かくあるハ、かくてハ、水をは不調の奇となり、作者ハ、書れをやくの意、そもありなめ、上小古今のえう、うもな」の等の処、ういへる如く、云ひさ、まらうむて、初学

をあやまちあむらても、名んと思ふハ、おのがを、うきく、て、こを、れ、だん、え、怪、つ、お、な、ぞ、て、の、う、り、と、い、ち、ん、

○文 けよを、涼、う、る、う、る、山、川、を、波、の、底、う、や、秋、身、や、う、う、ん、は、

△秋 ぞ、文字、ハ、き、る、ぞ、て、例、の、ぞ、の、何、の、ぞ、ハ、あ、う、ぬ、て、ハ、あ、ま、

か、廿四丁右小至て後批のを引る、あむといひ、秘やさぬ、秋の物、ふた、ま、手、虫、を、お、ち、ち、と、云、り、そ、ハ、向、け、て、き、る、ぞ、ち、り、と、思、は、ら、る、ハ、向、う、を、と、云、ハ、あ、く、り、バ、そ、れ、と、ハ、異、ち、れ、と、ぞ、て、詞、の、き、る、ハ、同、例、と、云、べき、向、う、ら、ハ、あ、う、て、き、る、ハ、古、今、異、小、丸、で、を、け、る、た、か、り、ぞ、女、布、菟、同、十、二、お、い、で、い、さ、ぬ、た、り、ぞ、の、類、即、玉、緒、三、の、十、五、卷、よ、り、あ、ま、こ、れ、を、出、せ、ら、く、か、る、を、今、秋、山、川、も、其、例、と、

ら、れ、て、怪、ひ、ま、き、ハ、ら、う、う、ら、た、一、た、を、考、る、よ、 又、清、正、集、一、本、ハ、山、川、丸、と、あ、

り、 一本と云ハ、猪苗代、謙、互、法、眼、藏、本、を、り、て、と、季、鷹、野、主、の、寛、政、中、に、写、せ、ら、る、本、を、其、法、眼、の、と、云、ハ、明、和、本、と、四、月、六、日、以、大、坂、江、田、氏、古、本、並、家、本、一、校、了、平、入、道、法、橋、兼、詔、と、あり、と、こ、え、た、れ、バ、原、ハ、古、き、字、本、の、難、故、と、言、ら、ん、と、し、秋、ハ、そ、の、ハ、用、な、き、と、な、れ、事、の、序、と、を、も、記、し、お、ハ、九、て、古、字、と、云、お、何、れ、の、道、の、書、字、と、そ、も、既、く、の、世、ハ、信、頼、り、て、い、づ、く、う、ろ、ろ、う、が、い、づ、く、失、ハ、つ、る、数、も、少、う、と、古、へ、好、む、佐、の、怪、に、あ、ら、り、が、う、こ、ふ、あ、れ、ハ、か、く、云、ふ、世、の、人、の、為、と、し、な、ら、ん、と、思、取、て、一、た、ん、件、の、写、本、の、一、を、季、鷹、野、の、又、い、く、他、本、若、富、士、谷、成、章、校、本、云、充、球、書、あり、山、川、丸、と、そ、ハ、あ、ま、ら、り、て、の、ま、の、を、ぬ、き、と、い、へ、る、と、も、お、お、え、た、り、は、よ、け、ん、

等ドモの^レ出づべきならん但秋アキの^レたかみ小隣オトナリをねるトモ也トモ

キハ虫を考はるべき一ハ虫の^レ方て其宜しかり越ハ即ハ玉結タマムスト云へたる然
を^レくじ本の方より作者の失と云べきなりハ文小存りればよき事也又つけえざるは
どハ及もくも思及ハ問え絶し^レり字誤トても有ん^レと疑ハ疑を強^レて非誤トべき
トハハ^レじかくハ^レハ^レの^レ蜻蛉日記トノ文^レひとねてまつ^レぬと云へるは^レなる
なり。ちハ尚宜く^レと云つ^レる入る^レにきハむべき久又紫式部日記ムスメの^レくちりハ史記の
文帝の^レを^レぞよむる^レべし^レと有るハ^レ重^レり^レわきと^レかき^レり^レなめり^レを^レよむる^レべ
き^レとせ^レも有^レし云説ハ^レたり^レと^レる^レべし^レ傍論^レナ^レれど^レを^レを^レ学^レむ^レん
ま^レ社字の^レめ小^レかく^レまで^レ云^レん

○^レカ^レハ^レハ^レと云

△^レハ^レ末橘花の^レ御文の中^レなるを^レ詞ハ^レ暑きて^レ共秋の^レ出せる^レなりハ^レ実
ハ^レ其御文詞ハ^レ以^レ前よりや^レて^レの^レ詞^レの^レ有^レて^レの^レぞ^レの^レ治^レま
る^レハ^レ方^レも^レ有^レん^レさ^レ思^レハ^レの^レと^レ云^レて^レ簿籍^レに^レて^レハ^レ而已^レ又耳^レま^レど^レ
訓^レみ^レて^レ其^レ云^レの^レハ^レや^レて^レハ^レ在^レても^レ傍^レえ^レられ^レる^レや^レり^レ文^レハ^レの^レと^レ云^レて^レ詞^レ乃

き^レろ^レて^レハ^レ原^レの^レり^レな^レき^レも^レな^レき^レ也^レ、^レ此^レを^レ六^レ丁^レの^レり^レ分^レに^レい^レつ^レる^レ如^レく^レの^レと^レい^レや^レハ
ハ上^レ及^レり^レて^レき^レろ^レ也^レ、^レ此^レの^レ二^レつ^レを^レ出^レぞ^レの^レと^レ云^レハ^レ必^レず^レ
それ^レろ^レづ^レける^レ用^レ云^レや^レぞ^レ用^レ云^レの^レき^レろ^レ也^レ、^レ此^レの^レ定^レり^レあり^レ
の^レ系^レハ^レ入^レり^レき^レ飲^レり^レと^レり^レぞ^レや^レづ^レと^レ云^レへ^レ臥^レる^レ迄^レハ^レ淋^レる^レなり、

○^レ躬^レや^レた^レ乃^レ云^レれ^レく^レぞ^レ也^レ

△^レ又^レ也^レハ^レ又^レる^レの^レ字^レ誤^レなら^レん^レも^レ訂^レ難^レし^レ此^レや^レなる^レい^レろ^レも^レ了^レの^レ奇^レの

○^レハ^レり^レの^レ字^レ誤^レ軟^レなど^レ次^レ々^レ何^レれ^レも^レ准^レへ^レて^レ考^レへ^レ訂^レ正^レべし^レ序^レ小^レい^レハ

人、躬恒集カ「小^レ若^レく^レ仍^レも^レた^レひ^レけ^レ於^レハ^レま^レく^レか^レへ^レる^レの^レふ^レぞ^レあ^レ也^レ

て^レと^レも^レえ^レたら^レふ^レ付^レて^レ既^レく^レ思^レは^レる^レ様^レ是^レハ^レ本^レ書^レニ^レ書^レき^レつ^レい^レろ^レ也^レ

定^レま^レれ^レる^レ様^レの^レ格^レを^レよ^レめ^レて^レ「^レと^レ」^レを^レ彼^レ後^レ撰^レ「^レみ^レる^レめ^レろ^レ」^レと^レぞ^レい^レふ

も^レし^レ也^レ。「^レと^レ」^レの^レ類^レ也^レ云^レべき^レ軟^レな^レれ^レど^レ何^レと^レな^レく^レそれ^レと^レハ^レか^レら^レり^レて

吟ト若おろく比のまれば、是ら八実にぞの法の潤もぬるりたえべき事、
 さて又此てふのふまで八世のぞハ及バぬとを初字の中ニハ心えざるも
 有人ハ世よりをさなざりあり、かふるに此の辞ハ不調と云べき事
 なるよく思しを、古字本をこれバ此の思をみちもたひくの於て、
 まよきかへこの心ぞあをけん、と仰り、斯てハ方四句も全ハ、つらに
 打ぶき、こそ其外も全辨の意趣をゆるたが、是にてよくきこゆ
 るおとぞ思てる、かよかくに古へを譲らるゝと想て容易くハまづ、
 らるりのにかん、

○君之集云

△こハ初なるいぬらごぞ云云ハ、彼集下一本、おりの人ともあやな

人ト有さハ人ト也のやハを、なり、されど我やと云へるハ、指上カミの
 松ト、小指何ハ手、但、此一本よれば、松と也のやハ別のやとて、あをる人
 へ掛るハ、只、あやのや、松トも、あやとて、次のたらひと也の一首ハ、一本
 一ハ方二句いひ、や、ま、し、と、われバ、や、り、ま、ま、る、に、つ、く、べ、を、ハ、哥
 仙集正保板の謬かるべし、万十ヤ、かくむかりあめの零フラクニ、爾不ト、き、ま、ら、
 の花山ト、か、わ、ら、な、く、ら、ん、の、雨、り、を、彼、哥、仙、集、ま、よ、て、ハ、雨、の、あ、ら、
 を、や、つ、も、と、せ、る、と、同、し、道、ち、小、て、ま、を、や、と、せ、る、に、乞、有、ら、ぬ、
此、かくむかり
の、ま、も、守、仙
 まよてハ方二方五のあや小や、り、ト、あ、ら、と、ふ、な、ぬ、り、方、五、句、が、わ、
 や、つ、ら、ん、と、あ、れ、ハ、あ、り、万、葉、ま、よ、て、ハ、方、五、句、ハ、方、二、句、ハ、ま、よ、て、を、や、
 ○後、松、十五おとろきぎを、いう小、ま、ま、ま、ぬ、む、丁、持、は、し、と、思、ふ、を、り、を、有、ら、
 △按、小、此、い、う、小、ハ、恐、く、ハ、本、守、の、有、て、其、を、ま、み、込、し、ら、ら、ん、彼、君、が

よれあをばハ何を玉の珠の長くとまごハそのすれ下身を、おのづから
いうより、この夏たえてつゞき人下を月ハらせられ 是りの或本分ホツ
格、この此二書十五丁小

出でる也
格考しの類をら其本分の慥とあられをなめるん此分主は憾たるからん

○拾 旅ゆるむ袖こそぬ ふれ りも心のあづかるのこハおかせざるあん

△必ふにそハ字誤有べし、次の糸に事の序しられバ格そおに、

○廿 系かかきうん ふ あまぬ くとも じまび 一 袖も今を か この む

めくことといまぐ下をかくうとこそ、後べきをむと、後づるハあがりか
かこむをむか、まをぬるれ、いふべきことまうて、これハ字一誤なり

△これハげ小字誤かるべし、是に付て考るに次上に出せる拾六のをも

初句様ゆけと有し、秋、又才二句袖こそぬと有し、秋、又才二句

の本ハ全く後人の字誤成べし、此外も字誤して、小をハ不調成となれ

る多うるべし、比那能歌語小、何其の糸に付てこれうれと云われ、る如く
凡て其本ハ更なる、諸書をおも為、或ハ疑も有て有き、欲きとあり、
ん、彼、あま、へ、せ、し、を、ハ、字、誤、よ、る、ま、の、辞、の、空、う、ぬ、を、ハ、か、り、な、く、作、者、の、ひ、か
こと、の、や、う、に、評、あ、ら、か、き、り、の、換、ひ、も、そ、出、来、る、格、六、書、十、八、の、う、り、け、考、え、ま、す、

○廿 秋の志 あ ち を ぬ く 船 を け る 月 を ぬ る 人 を

二の句、下、空、う、り、う、り、う、り、う、り、の、あ、れ、を、初、句、あ、ん、ん、き、と、い、ひ、詞、を、ハ
ぞ、も、て、う、り、き、ハ、こ、ま、を、い、ひ、詞、を、ぬ、は、け、う、り、ハ、う、り、う、り、と、い、ひ、べ、し、

△此秋古今類句集定家集等、ハ結句月をぬると有て類句集、其

一、頃までハ志あり、人、り、疑、る、と、比、那、能、歌、語、に、又、也、
序、小、云、り、ん、ま、う、り、
か、て、ハ、う、り、う、り、
と、了、そ、い、ふ、べ、し、と、有、り、付、て、思、出、れ、バ、元、補、集、か、る、あ、ら、う、り、き、田、子、の、補、か、り、初、い、ち、て
若、の、こ、う、れ、い、か、る、物、と、い、の、初、句、を、ぬ、ら、り、と、古、本、ハ、有、り、校、印、ハ、又、也、作、り、い、ち、て

○廿 秋の志 あ ち を ぬ く 船 を け る 月 を ぬ る 人 を

△此ハ実をの誤成べし、但、一、志、ハ、き、う、り、の、之、強、ち、ハ、云、れ、ぬ、る、
活、雑
二、編

三編一云へ 按ざるにむしり截るなれど用之へ連きもまるとる底
るがごとく 廻彩を足てあはべし己も友鏡小糸一をさぞの根ハ考へ改めつる
しうりさうりかうり底の教も知り亦略圖小必一うへさて又活雅小
辨論せるなり

○^{古丸} 意一きう方をかててそつりときけたてををれどもあはれらち

はまら一本ハハクましあまど
まももよらうとハまきこら

△秋をうハ^例の^{変格}とて調さざる方とハ思われどかく云をハ古今集
たろかろふあひて云やと云人も必者あめどさうハあはれど能一首のれ
もむき味ふべし彼やとる月さくぬらうをたふの類よをわらとつて
詞よて云捨らるに趣りりさるにこれハ古今集故あひて云よはあり

は、又序小エまん、かをかててその結びハらとと云つてく、つりときけしと云るより、か
ろこそたうらバありとてそと云べく思はるれど斯やうたうる例ハ当少くぬてまら、支
季ハ此方処のいうらぞや光ゆるをさく光えれど、季ハをうら、つらを其かあ、さ、さ
ぬとを能兄別べきとぞが、其方処のつりく、ハ、秋二の毫の十九廿下たる評論のせし今の分
の如きハ非一似てをなるなり、此書一書十丁尤なるそのつらとにちんあ、がひよとへさこそな
てら、と云処方どもあんハ下ハ、巴、とて、つら、とちんあ、らるるとをべきや、は思はるれ
ど、後年の後、よきか、とて、つら、ハ、秋、か、を、か、
了、そ、あ、り、と、ま、け、な、る、の、目、例、な、る、べ、ら、れ、バ、ま、り、

○^詞 秋の季小あ、と、ぬ、人、と、な、れ、月、の、を、く、る、秋、ど、ふ、そ、よ、と、こ、と、あ、り

新ニ いづく糸とまかの星あぬほやけとや吹風ふととあ、ぬ

△秋ハ^殊な^ど変格と云へしいや、と、小、き、こ、え、て、く、の、を、れ、と、云
べきならしとあハ、短きとえの及ぬあけめや、

○一本ホく小をけを字一誤きり等

△彼、同、さ、ら、ま、は、は、さ、ら、ま、は、ま、ト、モ、ホ、の、句、ハ、同、と、ハ、ま、き、け、ど、あ、る

右三

よりもしな^きとあておに出来べくしそ

○あまハ云。いとあませ也。

△爰ハいとあます。と云ういとあます。さう云べき処あり、世のいかまでのは

等なるべからしと云ふも及ぬとわれど、書の名に負ふそれが微瑕あるべし

○^吉秋の雪にまゐる花乃年をへる。ぞあまのうひよしと^そなく

^いはなれむわら。

△秋ハ、秋意のおく^サふ、なぞとてひのかひよしと云迄を、鹿の詞なりと

みて下をぞあくと有るは、きくべき板に教ふるぞ味ひ泳き、

○^後一とあるなり、久をばうへ梅花^云。云^日ニまよふは、こころと云ふおき云^云

△此後一なるハ、新恒のとこえたれど、貴之系よも
天慶三年四月右大将殿
屏風の昇世首人の歌

同

左四

右五

梅あり^ト 又えしころハ、新恒のを入りしころ、さして源氏紅梅也^ト 小川もよはく

さうふのころ^ト 梅花と有、考そありし白ハ、うりく区と云へるハ、まう

さして、後二なるハ、本万十也^ト 小在て、才也、即ち鬱東無堂衣とあれバ、^{無堂衣}

正とよめバ、よるれど、そハ誤りて、無ハ截断の方とて、^{ハナク}

よむべく、裳ハ、裁の意歎息と云ふ、あつても、かたのものごとく、六帖小つらひ、^{ハナク}

らん、知べし、序小云、秋守春去者、紀之許能暮之夕月夜とまづ有て、

一云、春去者、木陰多暮月夜とあり、その一云の方によれりたれど、物句

ハ何と云依ても、くれえ^ト ことハ、糸のをわざと改め、老とぞまゆる、ぞ

て、後撰又一本は、落夕、花陰うとて、^ト うれど、万も山と、うらぐく、小

そ、然るべきこと、わら、味ふべし、
○^令 卯花のまを、糸と又しむ、咲ぬま、^ぞ 八木のそ、わら、うらり、うら

右

△八代集抄小、四句、君と花のにこそ書て、ひが替せるを、契沖僧とへ心付
まごり人小、爰ハ期書るこそ能間也、是が辨説ハ玉勝間亦審なり、

○上件のまじいごとと、おつらにまじせる本は方よてハ、まごが写し。

△三辨定格又ききく四卷三毛より五や石本明書りの例ハげ小きるとなれど上に奉たる

小も「汝」の「実」有ぬの「元」不鳴子考かぶく月とあるともかゝるや

つら「哥」ハ、く其意「あれもや悲き」とう、「汝」も悲き「とら」いぬ「や」き

「な」ら、七字の数の為に通例「ハ」はづれても、「お」と「あれもかゝる」と

云て、「え」外「ふ」と云へるまを透せる「ハ」非る乎、おきにありやうやと云ひ

や文の例のまじくは、やうやと云たらん「ハ」多き
一一首のまじりての越きいふやうや、因由るやうなり、「あ」は「よ」く考ふべし。

玉緒線分 氏、巻終

